

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## A Quantitative Analysis of Gender Expressions : With a Special Focus on Double Standard Expressions Which Differently Use the Saffix "San" and "Shi" for Women and Men

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 和子, 女性と新聞メディア研究会 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001133">https://doi.org/10.57529/00001133</a>

## 新聞はジェンダーをどのように表現してきたか

——定型化されたダブルスタンダード表現としての「さん」と

「氏」の使い分けをめぐって——

田 中 和 子

女性と新聞メディア研究会

はじめに

- 1 過去の調査にみる敬称の女男別使い分けとその推移
- 2 データベースを用いた今回の調査方法について
- 3 「女史」と「氏」の間で——アウンサン・スーチーに対する敬称使用とその変遷
- 4 ノーベル平和賞受賞者への敬称使用にあらわれたダブルスタンダード  
 おわりに——ダブルスタンダード表現の解消に向けて

はじめに

女性と新聞メディア研究会は、男女雇用機会均等法が成立した一九八五年以降、ほぼ五年ごとに行う全国紙三紙（朝日新聞・毎日新聞・読売新聞）の『定期観測』を主軸に、新聞紙面にあらわれたジェンダー表現に関する量的

分析を継続してきた。

ここ二〇年以上にわたり、とりわけニューメディアの発展がもたらした多メディア・多チャンネル化にもなつて、「旧メディア」の代表格たる新聞の衰退が言われて久しい。それでもなお新聞は、日本新聞協会の調査によれば、全国紙、ブロック紙、地方紙等合計で一日に四八三五万部が発行されており、一世帯あたり〇・九部が購読されている計算となる<sup>(1)</sup>。また、多様なメディアの中でも、「社会に対する影響力がある」「知的である」「社会の一人としてこのメディアに触れていることは大切だ」「地域に密着している」「情報源として欠かせない」などといった特性において、他メディアに比べ、より高い評価を得ているコミュニケーション媒体であることに変わりはない<sup>(2)</sup>。

こうした特徴を有する新聞紙面の文章は、その時代の標準的な日本語として、広く社会に受け入れられている。一方で、それは、同時代の社会意識を広くその中に取り込んでもいる。したがって、新聞の紙面上にあらわれたジェンダー表現は、一般社会のジェンダー意識を反映していると同時に、そうした社会に流布するジェンダー意識を無意識のうちに読者に刷り込み、強化させる役割をも果たしていると考えられる。

これまでの女性とメディア研究会による一連の調査研究においては、ジェンダー表現について、以下に示した三つの基本的類型を析出して分析軸をつくり、ほぼ五年ごとに定期的な「観測」を行ってきた<sup>(3)</sup>。

- 一 女性であることを強調する表現——女性冠詞、女性の性を含み込んだ職業語、他者との関係で女性があらわされる語、女性に対するステレオタイプ表現
- 二 女性の存在が隠される表現——男性が世帯や家族を代表する表現、女性が男性に付随ないし従属させられる表現
- 三 女性と男性とで扱いの基準が異なるダブルスタンダード表現——女性を業績や地位で扱わない表現、女性と

男性とで異なる敬称使用、女性を名のみ、男性を姓または姓名で表す表現

本論で論じるのは、右の三つの類型のうち、第三の「女性と男性で扱いの基準が異なるダブルスタンダード」表現の中の、定型化され、必ずしも意識の上にはのぼらないまま、日常的に遂行されている「女性と男性に対する異なった敬称使用」である。

『ダブルスタンダード』の著書があるカナダの社会学者マーガレット・アイクラーは、ダブルスタンダードを、二つの同様のことがらが異なった規準によつてはかられ、評価されること<sup>(4)</sup>と定義づけているが、本調査研究もこの定義を踏襲している。たとえば、政界、職業界、スポーツ界などに進出している女性たちが記事になる際に、同じような立場にある男性が取り上げられるときのように、その手腕や能力、業績等がストレートに記述されるのではなく、容姿や家族役割についても不必要に言及されるというのが、こうしたダブルスタンダード表現の典型であろう。

この類のダブルスタンダード表現や描写は、本研究開始当時には少なからず使用されていたが、最近はあまり目につかなくなってきたようにみえる。一方、記事に出てくる人物の氏名に敬称をつけるにあたって、男性には「氏」を、女性には「さん」を用いるというような「氏とさんの使い分け」の慣行は、現在でもかなり根強いように見受けられる。

本論では、まず、過去二〇年にわたる「さん」と「氏」の使い分けの各調査年における実態とその変化を、一般記事と死亡記事に分けて振り返ってみる。のちに述べるように、死亡記事で用いられる敬称については、本調査対象の三紙のうち毎日新聞と朝日新聞が、女性と男性をともに「さん」で統一するようになってきているが、一般の記事においてもそのような動きがみられるのかどうか、過去のデータから改めて検討しておきたい。

次に、「敬称の使い分け」の具体的な変化の様子をみるために、世界的に著名であり、本調査開始時において、日本の新聞記事では「女史」が付される傾向が強かったアウンサン・スーチー（一九九一年にノーベル平和賞を受賞）を事例として、その呼び方の変化を各紙のデータベース・サービスをを用いて量的に把握する。

スーチーは、ビルマ（ミャンマー）における民主化運動を担う政治家として知られ、しばしば新聞で取り上げられているが、姓名のあとにつけられる敬称が、男性の政治家とは異なり、「女史」「さん」「氏」と、時代によって変化している。そうしたスーチーに対する異なった扱いの実態と変遷をみていく。

本論で三番目に行うのは、偉業をなし遂げた人たちが、その性の違いのゆえに新聞報道の上でどのように異なった扱いを受けてきたかについての分析である。その例として、スーチー以降、同じノーベル平和賞を受賞しながら、女性と男性とでどのような敬称の使われ方の違いがあるのか、データベース・サービスを利用してあとづけしてみたい。

## 1 過去の調査にみる敬称の女男別使い分けとその推移

### (1) ダブルスタンダード表現の典型としての敬称の使い分け

新聞におけるジェンダーにもとづいたダブルスタンダード表現の典型は、女性と男性とで、姓や名のあとにつけられる敬称・呼称（以下「敬称」と略記）が異なっている、というものである。

特に、政治・経済・文化などの領域における著名人や有力者が新聞に登場する場合、男性にはフォーマルで権威的印象を与える「氏」がつけられるのに対して、女性にはより日常的で親近感はあるが権威は「氏」より下との印

象を与えがちな「さん」が使われる傾向が強い。また、かつては「功成り名遂げた」女性に、「氏」とも「さん」とも異なる「女史」が付される傾向もみられた。

これまで本調査研究では、ジェンダーによる敬称の「使い分け」を分析するにあたって、①女性と男性が同じ記事の中に登場する場合の、双方に対する敬称の使われ方の異同、および、②女性ないし男性の一方の性が、一つの記事にそれぞれ単独で登場する場合の敬称の使われ方の異同、の二種類に分けて集計を行ってきた。

①の同一記事における女男の敬称の使い分けに関する具体例としては、たとえば毎日新聞二〇〇一年一月一日に掲載された、アフガニスタンの飢餓状況についての討論会に関する記事で、パネリストの作家の男性が「辺見庸氏」と紹介されているのに対し、同じパネリストでも脚本家の女性は「小山内美江子さん」と「さん」づけで呼ばれていたことがあげられる。また、読売新聞一九九一年一月一日におけるノーベル平和賞受賞者アウンサン・スーチーを紹介する記事では、「スーチー女史は一九七二年、オックスフォード在学中に知り合った英人学者、マイケル・マリス(略)氏と結婚、二児がある」のように、スーチーが「女史」、夫が「氏」と、女男で敬称の使い分けがなされていた。

次に②の、一つの記事に女性か男性のどちらか一方のみが出現する場合にも、女男で異なった敬称がつけられる傾向にあることは、同一面に掲載された二つの記事を比較してみるとよくわかるだろう。たとえば読売新聞二〇〇六年一月八日国際面の「著名記者 射殺される」という、ロシアで記者の女性が射殺されたことを報じる記事では「アンナ・ポリトコフスカヤさん」と「さん」づけになっているのに対し、同じ国際面の「大統領次席補佐官ロブ氏側近辞任」の記事では米大統領次席補佐官の男性に「氏」がつけられていた。また、毎日新聞〇六年一月一日の七面「人びと」面の「新憲法草案めど立たず」というビルマ関連の記事では、「アウンサンスーチーさん」

と「さん」づけであるのに対し、同じ「人びと」面の「サッカー審判拉致身代金 20 万ドル要求」では「ハジム・フセイン氏」と、氏が使われている。

(2) 同一記事中に女性と男性が登場する場合の敬称の使い分け

表 1 は、一九八五年から二〇〇六年まで、過去五回にわたって行ってきた「新聞紙面にあらわれたジェンダー」調査において、女性と男性に対してどのような敬称が用いられてきたか、その推移をあらわしたものである。<sup>(5)</sup> 最上段は、同一の記事（見出し、写真の説明文を含む）の中に登場した女性と男性に、異なった敬称が使われていた記事数であり、その下は、同じ記事の中に登場した女性と男性に、同一の敬称が使われていた記事数である。また、二重線をはさんだ下の二段は、一つの記事中に女性のみあるいは男性のみが登場した際に、それらの女男につけられていた敬称について、敬称の種類別に使用件数を集計したものである。これらは、各調査年の一〇月一日から一五日までの朝日・毎日・読売各紙朝夕刊の実物の紙面を対象としており、小説、マンガ、株式市況、ラジオ・テレビ面、広告は調査対象から除いてある。

まず、表 1 の二重線より上の、同じ記事中に女性と男性が登場した場合に最も多くみられる敬称の用いられ方は、両性ともに「さん」がつけられる同一敬称（九六年第三回調査からカウント開始）であり、三紙合計で、一九九六年二〇四件、二〇〇一年一四八件、〇六年二五二件の記事件数となっている。

次いで多いのは、両性ともに「氏」がつけられる同一敬称で、本調査開始当初の一九八五年はゼロ件、九一年は五件と少なかったが、九六年八三件、〇一年三七件、〇六年七二件と、増えている。

このように、同一記事に両性が出てくる場合、どちらに対しても同じ敬称が使われるのが一般的ではある。しか

表1 女男別一般記事における敬称の使われ方の推移 (3紙合計)

(単位: 件)

			1985年	1991年	1996年	2001年	2006年
同一記事中に女男両方が登場(記事数に件数)	女男で使い分け	女性「さん」/男性「氏」	12	25	36	7	19
		女性「女史」/男性「氏」	4	7	0	0	0
		その他女性と男性別敬称	—	—	46	13	24
	小計		16	32	82	20	43
	女男とも同敬称	女性「氏」/男性「氏」	0	5	83	37	72
		女性「さん」/男性「さん」	—	—	204	148	252
その他女性と男性同一敬称		—	—	13	7	3	
小計		0	5	300	192	327	
同一記事中に女男どちらか一方の性が登場(語の件数)	女性単独の場合の敬称	氏	0	2	27	50	71
		女史	32	40	10	1	1
		さん	—	—	319	793	880
		その他	—	—	12	40	87
		ニックネーム	—	—	—	24	13
	小計		32	42	368	908	1052
	男性単独の場合の敬称	氏	—	738	875	2041	2421
		さん	—	—	684	1855	1894
		その他	—	—	108	66	97
		ニックネーム	—	—	—	28	53
小計		—	738	1667	3990	4465	

※一印は未調査

しながら、表1の最上段にみるように、同一の記事の中で、性別によって敬称が使い分けられているケースも見受けられる。その典型は、女性には「さん」、男性には「氏」がつけられるという使い分けで、三紙合計で八五年に一二件、九一年に二五件、九六年に三六件、二〇〇一年に七件、〇六年には一九件みられた。また、女性には「女史」が、男性には「氏」がつけられるケースも、調査開始当初の八五年に四件、九一年に七件みられたが、九六年からは皆無となっている。

このように、同一記事中での「女史」と「氏」の使い分けは、九六年から皆無となったのに対し、同じ記事の中で女性には「さん」、男性には「氏」が用いられるという使い分けは、減少傾向にはあるものの、決してなくなっているわけではない。

ちなみに、政治面や社会面といった掲載紙



面別<sup>(6)</sup>に使い分け傾向の違いがあるかどうかを、二〇〇六年の三紙合計一九件についてみると、女性に「さん」、男性に「氏」が使い分けられた記事は、政治・経済系（二面、総合・政治、国際、経済、科学、教育の各面からなるジャンル）が九件、文化・生活系（生活、文化・メディア、地域、スポーツの各面からなるジャンル）が九件、社会系（社会面からなるジャンル）が一件であった。

同一記事中にみられる女男に対する異なった敬称使用の例を示しておく、政治・経済系ジャンルに分類した一面で扱われていた同じ作家同士に対して、女性は「米原万里さん」、男性は「井上ひさし氏」（読売、一〇月六日夕刊）、また文化・生活系ジャンルに分類したアミューズメント面で同じテレビキャスターであるにもかかわらず、女性は「安藤優子さん」、男性は「久米宏氏」（毎日、一〇月二日）と呼ぶ、といった具合である。

次に、一つの記事に女性ないし男性の一方の性のみが登場する記事についてみてみよう。

(3) 同一記事中に女性ないし男性のどちらか一方の性だけが登場する場合の敬称の使われ方

表 1 の二重線をはさんだ下段は、同じ記事の中に女性と男性のどちらか一方のみが登場する場合に、それぞれの人物に、「氏」「さん」「女史」などの各敬称がどのくらいの頻度でつけられているのかを示したものである。先みた二重線より上段の数値は、その中で「使い分け」が行われていた、あるいは行われていない「記事の件数」であるのに対し、下段の数値は、使用されていた「各敬称自体の数」である。

この表下段をみてまず最初に気づくのは、何らかの敬称がつけられて新聞に載った女性と男性の登場件数の差である。女性につけられた「氏」と「さん」のみならず、男性につけられた「氏」と「さん」の件数をも数え始めた第三回調査（一九九六年）以降をみると、九六年は、女性三六八人に対し男性一六六七人で女男比は約一對

五、二〇〇一年は、九〇八人对三九九〇人で約一対四、〇六年は、一〇五二人対四四六五人で約一対四であった。そもそも新聞においては、政治・経済関係の記事のウェイトが高く、男性の政治家や経済人などが取り上げられるケースが多いということが出現頻度の女男差の理由の一つとしてあげられようが、紙面別にみた女男の登場比率や、女男の敬称の使い分けの傾向については、すぐあとでふれる。

次に、表下段から一目瞭然なのが、女性が出てくる場合は大抵「さん」づけで、「氏」がつけられることは稀であるのに対して、男性が出てくる場合には大抵「氏」がつけられ、「さん」がつけられることの方が少ない、ということである。

敬称別の推移は表1下段に明らかなおりであるが、女性と男性の登場頻度が異なるため、ここでは絶対数の比較ではなく、「氏」と「さん」の両方を数え出した一九九六年以降の各年の女性の登場総数ならびに男性の登場総数をそれぞれ一〇〇%とした場合の各敬称の比率によって、女男に対する敬称の使われ方の違いを、みてみることにしよう。

まず、女性に対する「氏」の使用は、一九九六年が二七件で敬称全体の七・三%、二〇〇一年が五〇件、五・五%、〇六年が七一一件、六・七%と、絶対数では増えているものの、比率にすると一けた台で推移しており、あまり変化がないことがわかる。それに対し、男性に「氏」がつけられる度合いは、九六年には八七五件、五二・五%、〇一年は二〇四一件、五一・二%、そして〇六年に二四二一件、五四・二%と、常に半数を超えている。

一方「さん」の使用についてみると、女性に対する「さん」の使用頻度は九六年三一九件、八六・七%、〇一年七九三件、八七・三%、〇六年八八〇件、八三・七%と、経年によってもあまり変化がみられず、毎回八〇九割を占めている。

それに対し、男性への「さん」の使用は、各年それぞれ六八四件、四一・〇%、一八五五件、四六・五%、一八九四件、四二・四%と、女性に対して「さん」が使われる比率の半分でしかない。

次に、女性にのみつけられ、本調査開始当初の一九八五年には三二件、九一年には四〇件みられた「女史」という敬称は、九六年になると二〇件、二・七%へと減少し、二〇〇一年、〇六年ともに一件、〇・一%と、現在ではほとんどみられなくなっている。

このように、記事中に女性ないし男性が単独で登場する場合には、使われる敬称の種類が大きく異なり、女性には「さん」、男性には「氏」がつけられやすいという傾向が今もつて続いているのである。

#### (4) 紙面ジャンル別にみる女男どちらか一方の性だけが登場する場合の敬称の使われ方

先に、同一記事中の敬称の使い分けについて掲載紙面のジャンル別にみたのと同じように、二〇〇六年調査のデータから、同一記事においてどちらか一方の性のみが登場する場合に、女性と男性それぞれにどのような敬称がつけられているかを、紙面ジャンル別にみてみよう。

最初に、女性と男性の登場比率をみてみたところ、政治・経済系の面における女男比は、二四〇人対二二九八人の約一対一〇であり、いわゆる「硬派面」では、男性の登場者が圧倒的多数を占めた。それに対して生活・文化系の面での女男比は五二二人対一四五七人の約一対三、社会系の面での女男比は三〇〇人対七一〇人の約一対二で、いわゆる「軟派面」では、女男の登場比の差が小さくなっている。この新聞記事の紙面ジャンルにおける登場頻度のアンバランス自体が、政治や政策決定の場における女男の共同参画が進んでいないことの指標となつているともいえよう。

次に敬称の違いをみてみると、まず、政治・経済系の紙面ジャンルでは男性の場合、二二九八人中一八六六人、八一・二%と、圧倒的に「氏」がつけられているのに対し、女性は二四〇人中六二人と、二五・八%に「氏」がつけられていた。「氏」の女男比には、約一対三の開きがある。

それに対し、「さん」に関しては、「氏」とは対照的に、女性への「さん」の使用が多く一六七人、六九・六%であるのに対し、男性への「さん」の使用は四〇三人、一七・五%にとどまっている。

続いて生活・文化系の面をみてみると、まず気づくのは、政治・経済系と比較して「氏」の使用が女男とも少ない点である。女男別にみると男性では、一四五七人中四二二人と、二九・〇%が「氏」であるのに対して、女性では五一二人中七人と、一・四%に「氏」がつけられるにとどまっている。「氏」の女男比は一対二〇で、大きな開きがある。他方、女性に対する「さん」の使用は、大多数の四五五人、八八・九%を占め、それに対し、男性に対する「さん」の使用は九四二人、六四・七%であった。

次に、社会系の面をみてみると、生活・文化系の面と同様「氏」が少なく、男性では七一〇人中一三三人、一八・七%に「氏」がつけられていたのに対し、女性では三〇〇人中二人、〇・七%に「氏」が使われているに過ぎなかった。この面における「氏」の女男比は、一対二七と、生活・文化系の面よりも差が大きい。それに対して「さん」は、男性五四九人、七七・三%、女性二五八人、八六・〇%に、使われていた。

以上でみてきたように、硬い面とされ、総体として「氏」の使用頻度が高い政治・経済系の紙面では、女性にも「氏」がつけられる度合いが他の紙面よりは高いものの、男性と比較した場合にはその三分の一にとどまっている。ひるがえって、より軟い面とされ、全体的には「氏」の使用頻度が低く、「さん」の使用頻度が高い生活・文化系と社会系の面においても、ひとたび女男別の「氏」の使用頻度を目を転じれば、生活・文化系では女性は男性の二

表 2 女男別死亡記事における敬称の使われ方の推移 (3 紙合計)

(単位：件)

			1985年	1991年	1996年	2001年	2006年
同一死亡記事 中に女男両方 が登場	女男で使い分け	女性「さん」/ 男性「氏」	153	181	129	72	19
	女男とも同敬称	女性「さん」/ 男性「さん」	0	0	0	41	47
同一死亡記事 中に女男どち らか一方が登 場	女 性	氏(単独および複数) さん(単独および複数)	0 5	0 9	1 3	0 6	0 10
	男 性	氏(単独および複数) さん(単独および複数)	30 0	103 0	95 3	39 19	9 53
そ の 他			1	13	6	0	1
合 計			189	306	237	177	139

※いずれも記事件数ベース

○分の一、社会系では二七分の一という開きがあり、むしろ女男間の落差は政治・経済系よりも大きいことが明らかとなった。

(5) 死亡記事における敬称の使い分け

表 2 は、本研究会がこれまでの「新聞紙面にあらわれたジェンダ」調査において、一般記事とは別に、死亡記事に出てくる死亡者本人や喪主などに用いられている敬称の使われ方を集計したものである。<sup>(7)</sup> 最上段は、一つの死亡記事の中に女性と男性が登場し、それらの人びとに付される敬称が性によって使い分けられている記事の件数、二段目は、女性と男性に同一の敬称が使われている記事件数、そして下の二つの段は一つの死亡記事中に、女性あるいは男性のどちらか一方の性が単独ないし複数で登場する場合に各敬称が用いられている記事の件数を示している。

これによると、まず、同じ死亡記事内で女性に「さん」、男性に「氏」をつける使い分けは、一九八五年一五三件、九一年一八一件、九六年一二九件と推移し、二〇〇一年は七二件に減じたあと、〇六年に一九件と大きく減少した。そしてそうしたトレンドと対照をなすように、九六年までは皆無であった女男ともに、「さん」をつけるケー

すが、〇一年に四一件、〇六年に四七件みられるようになっていく。

当初の死亡記事では、死亡した著名人の男性に「氏」がつけられ、喪主となった妻や母を「さん」と表記するものが多くみられた。一方、ベストセラーを出した童話作家の「吉田とらさん」に対して喪主の「聖(さとし)氏」(朝日、九六年一月二日夕刊)というケースのように、死亡した本人が著名人でも女性である場合には、自動的に「さん」がつけられ、その女性をとむらう男性には自動的に「氏」がつけられていた。

また、死亡者本人をはじめ、女性のみが死亡欄に掲載される場合、その人物の敬称として「氏」が使われることは、調査当初からほとんどみられなかった。一方、男性のみが掲載される場合、当初からほとんどのケースで「氏」が用いられてきた。ところが、そうした「氏」の使用は、前述のように二〇〇一年から減少に転じ、かわりに「さん」が使われるケースが増えてきている。

これを、各年の死亡記事合計を一〇〇%とした比率でみると、女性に「さん」、男性に「氏」を付す敬称の使い分けは、八五年には八一・〇%を占めたものが、九一年五九・二%、九六年五四・四%、二〇〇一年四〇・六%と漸減してゆき、〇六年には一三・七%に急減したことが確認できる。その一方で、九六年までは皆無だった女男ともに「さん」の扱いが、〇一年は二三・二%、〇六年には三三・八%と増加した。

二〇〇〇年代に入って死亡記事の敬称の使い分け件数が大きく変化をみせることになった理由は、毎日がいち早く一九九九年に死亡記事における敬称の女男使い分けをやめ、次いで朝日が二〇〇二年にやめて、死亡者や喪主の性別にかかわらず女男とも「さん」という記述で統一したことによる。ただし、読売は二〇一二年現在、死亡記事における女性の呼称に「さん」、男性に「氏」という、女男で敬称を使い分ける記述を続けている。

## 2 データベースを用いた今回の調査方法について

以上でみてきたように、まがりなりにも死亡記事においては、新聞紙面上で性別によって「さん」と「氏」を使い分けるダブルスタンダード表現が、制度的に改められつつある。しかし、その前にみたように、一般記事においては、両性が同じ紙面に登場する場合にはダブルスタンダード表現が減りつつあるものの、女男のどちらか一方が登場する記事の場合には、ジェンダーによる敬称の使い分けがいまだに続いており、その変化は必ずしも早いとはいえない。

そこで、これらの傾向をより詳細にみるために、本論では新聞記事のデータベース・サービスを利用して、新聞紙面における女性と男性に関する敬称のダブルスタンダード表現について、あらためて量的な調査を行い、分析してみることにした。

具体的には、①本研究会でデータを取り始めた当初に使われることの多かった「女史」という敬称の頻度と推移、②典型的なダブルスタンダード表現がみられる一九九一年ノーベル平和賞受賞者アウンサン・スーチーに対する敬称の使われ方、③スーチー以降のノーベル平和賞受賞者につけられた敬称の女男別集計とその推移をみていく。

新聞記事データベースには、紙面構成や記事の面積、写真などをビジュアルにはつかむことができない、というデメリットはあるものの、一方で、実際の新聞紙面を読んでチェックするという膨大な作業を省くことができ、また見落としがないというメリットがある。そのため、使用される語彙の出現頻度の集計には威力を発揮する。女性

と新聞メディア研究会は、これまでも一連の「新聞紙面にあらわれたジェンダー」調査のいくつかにおいて、必要に応じて、データベースを用いた分析を取り入れてきたが、今回は全面的にデータベースに依拠して分析を行う。

調査対象の新聞は、女性と新聞メディア研究会の従前の調査に合わせて朝日・毎日・読売の三紙とし、朝日は「聞蔵（きくぞう）IIビジュアル」、毎日「毎索（マイサク）」、読売は「ヨミダス歴史館」の、各東京本社版・朝夕刊のデータベースを用いた。

データベースには、見出し、記事、写真のキャプションが全て電子化されて収録されている。そのデータベースに、検索語としてそれぞれ、人名、敬称、人名AND敬称を用いて検索をかけ、その語を含み込んだ見出しの件数、記事の件数を集計した。なお、朝日は八四年八月からの記事が、毎日「八七年一月からの記事が、読売は八六年九月からの記事が、それぞれデータベース化されており、開始時期は必ずしも各紙横並びにはなっていない。そのため、三紙のデータがそろい、正確に比較できるのは、八七年からである。

### 3 「女史」と「氏」の間で——アウンサン・スーチーに対する敬称使用とその変遷

#### (1) アウンサン・スーチーのノーベル平和賞受賞

ビルマ（軍事政権は八九年に英語による国名を「ミャンマー」へと変更したが、本稿では「ビルマ」という国名を用いる）は、日本でもよく知られた国である。戦前の一時期に日本が占領していたが、戦後一九四八年に英連邦から独立後、一九六二年に軍事クーデターによる独裁政治が敷かれ、長らく軍事政権が政府を掌握する時代が続いた。中でも、民主化を訴える国民民主連盟（NLD）に所属し、民主化運動を担ってきたアウンサン・スーチー



は、何度も政府によって拘束・軟禁され、長年にわたって自由を奪われてきたことで、その動向がメディアでしばしば取り上げられてきた知名度の高い社会運動家である。

アウンサン・スーチーは、「ビルマ建国の父」といわれるアウンサン將軍の子として一九四五年にビルマの首都だったラングーンに生まれ、インドや英国の大学で学んだのち、公的な仕事に就いていた。その間に英国人の研究者と結婚し、子どもをもうけている。その後八八年にビルマに戻ったスーチーは、民主化を求める戒厳令下での学生・市民らのデモに参加し、演説を行うなどしてたちどころに人びとの支持を集め、国民民主連盟 (NLD) の結党に加わって総書記となり、ビルマの民主主義と人権を回復する民主化運動の指導者として、シンボリック的存在となった。

しかしながら、一九八九年七月、スーチーは、軍事政権によって国家転覆防衛法違反のかどで自宅軟禁された。翌九〇年の総選挙では、総書記のスーチーが軟禁中でありながら、NLD が圧勝した。にもかかわらず、軍事政権側は政権交代を拒んだため、国際的に多くの非難がわき起こった。そのような中、スーチーは、政府に弾圧されながらも民主化のための非暴力闘争を貫き、メッセージを発し続けた功績により、一九九一年、ノーベル平和賞を受賞した。

その後一〇年以上にわたって何度も軟禁、解放、軟禁が繰り返され、その間スーチーは、解放後の遊説中に襲撃されたり、体調を壊して入院したり、二〇〇九年には国家転覆防衛法違反で起訴され、裁判にかけられて有罪（執行猶予つきで自宅軟禁）となるなど、辛酸をなめる。一〇年には二〇年ぶりの国会（連邦議会）の総選挙が行われ、スーチーも七年半ぶりに解放されて、翌年には文民政権が生まれたものの、大統領をはじめ軍事政権の幹部が残ったため、国際的にはなお信頼される政権ではなかった。しかしながら、政治犯が釈放されるなど政権も軟化し

はじめ、一二年四月に行われた国会議員の補欠選挙では、NLDから立候補したスーチーが当選を果たし、国会議員となった。

## (2) アウンサン・スーチーに当初付されていた「女史」

アウンサン・スーチーのノーベル平和賞受賞を報じる当時(一九九一年一〇月)の新聞をみると、「解放の契機に」ミャンマーのスーチー女史がノーベル平和賞受賞(朝日、一〇月一五日)という見出しや、「今年のノーベル平和賞がミャンマー(旧ビルマ)の反体制・民主化運動指導者、アウン・サン・スーチー女史(46)に決まった。」(毎日、一〇月一五日)と書かれた記事、また、「ミャンマー軍政がただちにスーチー女史の軟禁を無条件に解き、政治犯を釈放するよう求めたい。」(読売、一〇月一六日)とする社説のように、スーチーを、その名のとに敬称の「女史」をつけて表現する記事が大半であった。次節(3)で述べるように、九一年七月から一二月までの半年の間に、スーチーの名に「女史」がついた見出しは、スーチーの名が出てくる見出し三紙合計一二二件のうち八八件と、約七割を占めた。

「女史」とは、『広辞苑【第六版】』によると、「①中国で、後宮に仕えて記録をつかさどった女官。②日本で、文書の事をつかさどった女官。③社会的地位や名声のある女の人。また、その氏名に添える敬称。」とある。これらから転じて、男性中心の社会で「肩ひじ張った女性」、男性に伍して活動する女性への「揶揄的な敬称」というイメージが、この語にはつきまといっている。<sup>(8)</sup>

また、これも本稿後半の歴代ノーベル平和賞受賞者の敬称について量的分析を行う第4章で詳しく紹介するが、受賞時の九一年一〇月から一二月までの三カ月間に、三紙の見出しと記事の中でスーチーにつけられた「女史」と

いう敬称の総数は、スーチーの名が出てくる全三七〇件のうち二四三件を占め、六五・七％にのぼった。次いで、スーチー「さん」という敬称の数が一〇六件、二八・七％、その他名前に何もつけない「敬称なし」が一五件、四・一％、「書記長」という「肩書き」が二件、〇・五％みられた。

一方、アウンサン・スーチーと同じ九一年にノーベル文学賞を受賞した作家の女性、ナディン・ゴードイマは、どのように記述されていたであろうか。ゴードイマにつけられた敬称について、この年の受賞時一〇月から二月いっぱいまでの見出し・記事ともに全てカウントしてみたところ、「91年ノーベル文学賞 南アのゴードイマ女史にアパルトヘイト糾弾の著作」(読売、一〇月四日)という見出しのように、「女史」が三紙合計で一五件みられた。ゴードイマの名が出てくる全四一件の見出し・記事に対する比率にすると三六・六％である。一方、「南アの女性作家・ゴードイマさんにノーベル文学賞『人種隔離』批判」(朝日、一〇月四日)の見出しのように、「さん」の数は合計一四件で、三四・二％を占める。また、何もつけない「敬称なし」が合計一二件、二九・三％あった。「女史」と「さん」、そして「敬称なし」に、表記がほぼ三分されたかたちだ。スーチーは七割近くが「女史」で、次いで三割近くが「さん」だったことと比較すると、同じ年のノーベル賞受賞者の女性であっても、ゴードイマの場合はやや扱いが異なる結果である。

それでは、同等の立場にある男性には、どういった敬称がつけられているのだろうか。スーチーやゴードイマと同じ九一年にその他のノーベル賞を受賞した男性たちの、一〇月から二月までの三カ月間の見出しと記事の敬称数をみてみた。

その結果、物理学賞受賞者のピエール・ドジャンヌは、三紙合計で「氏」二件、「さん」〇件、「教授」の「肩書き」一一件、「敬称なし」四件となった。化学賞のリヒャルト・エルンストは、「氏」二件、「さん」〇件、

「教授」の〃肩書き〃一九件、〃敬称なし〃二件であった。また、生理学・医学賞のエルウィン・ネーアーは、「氏」〇件、「さん」一件、「博士」「学部長」の〃肩書き〃一三件、〃敬称なし〃二件で、同賞のベルト・ザクマンは「氏」〇件、「さん」一件、「博士」「学部長」の〃肩書き〃一一件、〃敬称なし〃一件であった。そして、経済学賞を受賞したロナルド・コースは、「氏」六件、「さん」〇件、「名誉教授」の〃肩書き〃七件、〃敬称なし〃六件となっている。

このように、同じ九一年のノーベル賞受賞者であっても、男性は「肩書き」で呼ばれることが圧倒的に多く、次いで「氏」がつけられるケースが多い。ゴードイマの場合は作家のため、所属や地位を示す肩書きがないということはあるが、スーチャーはNLDの書記長の職にあつたにもかかわらず「肩書き」呼称がほとんど使われていなかったことに、男性との大きな違いがみられる。

「氏」に関しては、『広辞苑【第六版】』によれば、「①同じ血族の集団。それを表示する名。うじ。姓。②嫁した女の実家の姓氏に添えて、出身を示す語。『妻紀』③人名に添えて敬意を表す語。転じて代名詞的に話題の人を表すのに用いる。『一は関西出身の実業家で』と説明されている。新聞記事の「氏」の場合は③の「敬意をあらわす語」があてはまるうが、特段に、男性につけられる敬称とはされていない。

一方、接尾語「さん」は、『広辞苑【第六版】』では、「(サマ)の転①人名などの下に添える敬称。『さま』よりもくだけた言い方。『伊藤』『奥』②丁寧という時につける語。『御苦労』『お早う』」とある。人につける敬称としては「くだけた」いい方であるというところに、ポイントがありそうである。

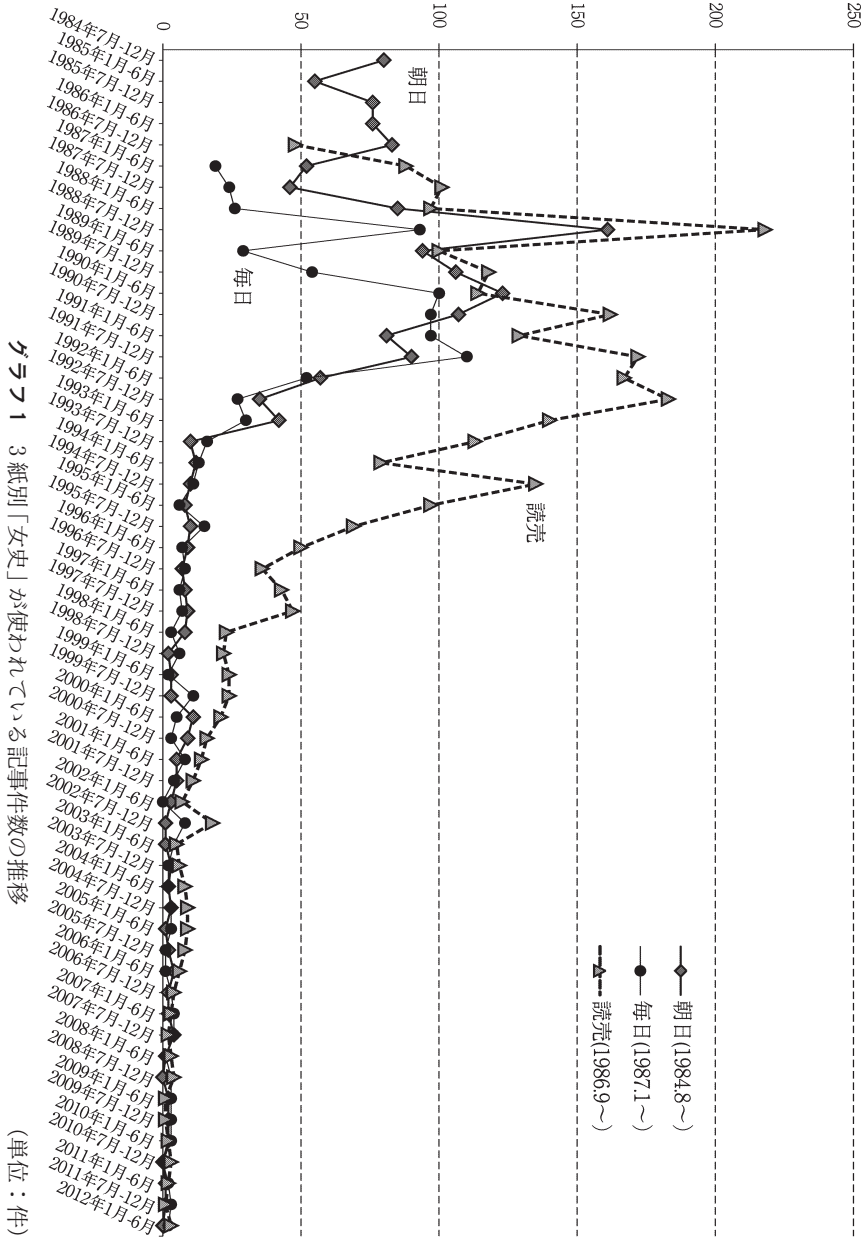
このような、女性と男性の著名人に対する敬称の差、また同じ女性の著名人でも敬称が分かれるケースについての比較は、ノーベル平和賞受賞者を対象に、のちにあらためて数量的に調査を行って分析を加えることにする。

(3) 三紙における「女史」の使用とその推移

アウンサン・スーチーのノーベル平和賞受賞時に目立った「女史」という敬称であるが、そもそも、スーチーに限らず、新聞紙上では「女史」という敬称がどれほど使われているのだろうか。量的分析を行うにあたって、最初に、朝日、毎日、読売三紙のデータベースから、スーチーも含む著名な女性たちにつけられている全ての「女史」の数量と推移をみてみたい。

グラフ1は、三紙それぞれの記事中で、「女史」という語が用いられていた記事の件数を、半年ごとにまとめて、その経年推移をみたものである。ここで数えたのは「記事件数」であり、ある記事（見出し、本文、写真に添えられている説明文なども含む）の中にその語が一つ登場しても複数登場しても一記事（一件）としてカウントされている。したがって、その語が用いられたすべての頻度（延べ語数）ではないことに留意する必要がある。また、調査方法のところでも述べたように、朝日は一九八四年四月から、毎日は一八七一年一月から、読売は八六年九月からそれぞれデータベース化されている。ここでは各紙それぞれさかのぼれる限りのデータを表示したが、三紙のデータが全てそろっているのは、八七年からである。

グラフ1から、各紙別に、「女史」の使われている記事件数の推移をみると、まず朝日は、一九八四年七月～二月（以下「下期」と記述する）から八七年一月～六月（以下「上期」と記述）にかけて五〇件前後から八〇件前後の間で推移してきたものが、八八年下期には一気に一六一件に増加し、全調査期間中のピークを形づくっている。八九年から九〇年代にかけては、八九年上期九四件、八九年下期一〇六件、九〇年上期一二三件、九〇年下期一〇七件と一〇〇件前後を維持していたものの、その後は減少傾向が著しく、九六年上期からは一桁台の場合がほとんどで、二〇〇八年下期、二〇一〇年下期では一件もみられなかった。

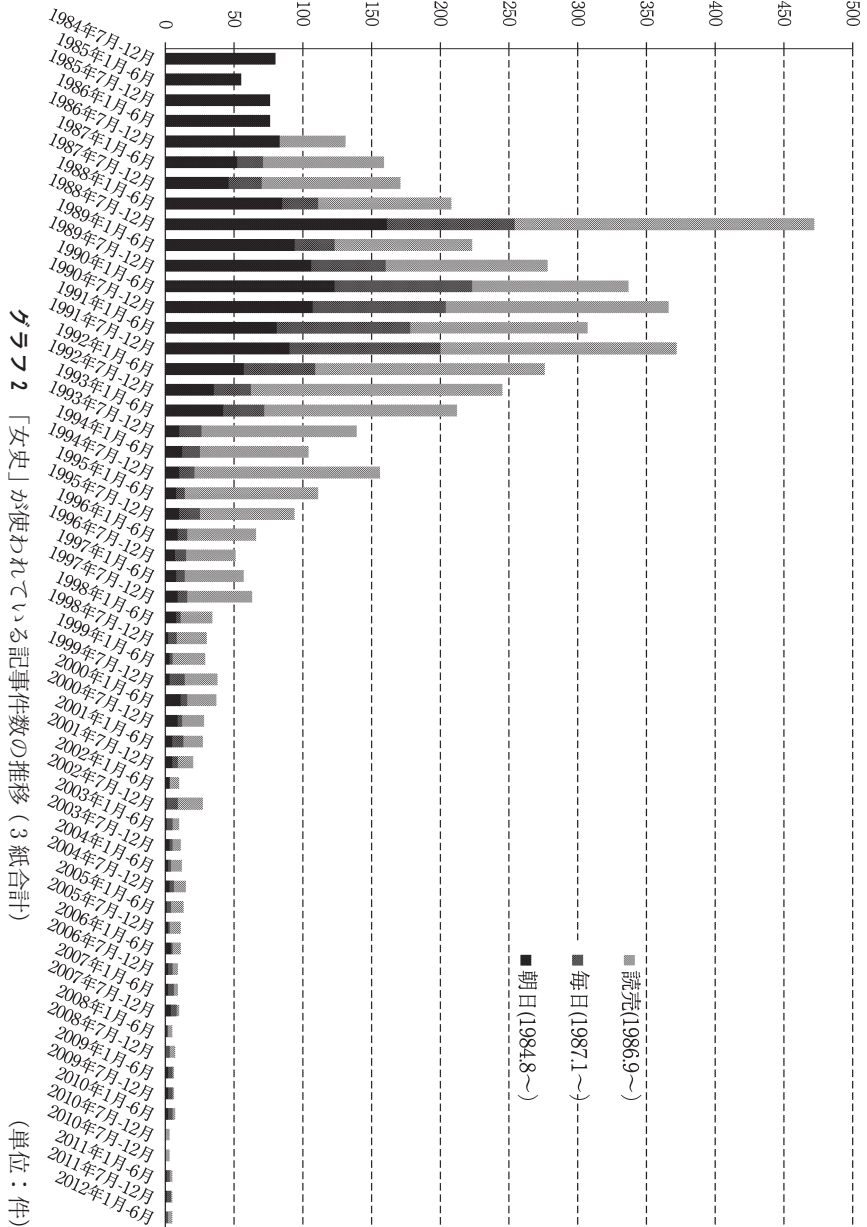


次に毎日は、データベース化が開始された八七年以降、二〇件前後を維持していたものが、一九八八年下半年に九三件へとねあがった。そのあと、九〇年上期から九一年上期にかけて一〇〇件前後と、朝日と同様に高件数で推移し、九一年下期に一〇〇件とピークを迎える。それ以降は、「女史」が使用される記事数は徐々に減ってゆき、九三年下期には一〇件前後、九六年上期からはほぼ一桁台となって、今ではほとんどみられなくなった。

読売の場合は、前二紙とは少し様相が異なり、一九八七年下半年の段階で「女史」の使用はすでに一〇〇件を超え、八八年下半年には二一八件と三紙の中では突出した使用量となっていた。その後は、九二年下期の一八三件を第のピーク、九四年下期の一三五件を第三のピークとして、少しずつ使用件数を減らしながらも、九〇年代前半まではおおむね一〇〇件台の「高水準」を維持していた。そして九〇年代半ば以降も、二〇件から五〇件という、他の二紙に比べてかなり多い記事数を記録し、「女史」が使われた記事件数が一桁台で推移するようになるのは、他紙よりもだいぶ遅い、二〇〇三年上期からのことである。

以上三紙別の動向を見てきたが、期間中の「女史」が出現する記事件数の総合計は、朝日一六一三件、毎日九三七件、読売二七六〇件にのぼる。ただし、前述したように、各紙でデータベース化の開始時期が若干ずれており、集計した期間が異なるので、各紙のデータがそろう一九八七年初期からの記事件数の総合計をあらためて計算してみると、朝日一二四三件、毎日九三七件、読売二七一二件となった。読売で「女史」という敬称が使われた記事が最も多く、毎日の三倍近くに、また朝日の二倍以上にのぼっている。八七年初期からの総合計をもとに、「女史」使用記事件数半期あたりの平均を出してみたところ、朝日は二五・九件、毎日は一九・五件、読売は五六・五件となった。

グラフ 2 は、朝日・毎日・読売の各紙で「女史」が使われている記事の件数を積み上げたグラフである。三紙が





データ上でそろうのは、一九八七年上期からとなるが、これによると、八八年下期が合計四七二件（朝日と読売がこの時にピーク）と最も多くなっていることが見て取れる。これは、主として国際面や外報面、外電で、「スーチー女史」「ブット女史」「ヒルズ女史」を筆頭に、多数の女性が「女史」という敬称つきで登場した累積効果によるものである。この時期には学者、芸術家、政治家などとして活躍している国外の女性の敬称として、「女史」がごく普通に用いられていたのである。

そして、アウンサン・スーチーがノーベル賞を受賞した九一年下期は、各紙とも通常より「女史」を用いた記事数が増え、合計三七二件と、八八年下期に次ぐ第二のピークを形づくっている。

だがその後、二〇〇三年上期から、三紙合計でも一〇件ないしそれ以下となり、この文字が入った記事はほとんどみられなくなっている。「女史」は、もはや「生産力」を失った語といつてよいだろう。現在、稀に「女史」が使われるケースとしては、作家など新聞記者以外の外部執筆者が寄稿した文や、過去に使われた文章をそのまま引用した場合などがほとんどである。少なくとも新聞記者が記事を書く際に自ら「女史」を使用することは、ミレニウムを跨いだ二〇〇〇年前半以降、ほとんどなくなっている。

このように、「女史」という敬称だけに關していえば、明らかに「化石化」しつつある。

それでは、「女史」がなくなってきた分、女性に対してどんな敬称が付されるようになってきているのであろうか。

#### (4) 見出しにみるアウンサン・スーチーに対する敬称の推移

そこで、アウンサン・スーチーを事例として、スーチーが新聞紙面上に登場する際にどのような呼び方がなされ

ているかを、朝日・毎日・読売のデータベースを用いて量的に把握して見ることにしよう。

スーチーがビルマに帰り、メディアで取り上げられるようになった一九八八年下半年から二〇一二年上期までの「スーチー」と表記された記事を検索し、その敬称を調べてみるが、記事件数、さらには語の全出現頻度を検索すると膨大な量にのぼるため、ここでは見出しのみに限って抽出した。見出し(ヘッドライン)は、記事の内容を要約して示すものであるだけでなく、一目で読者を惹きつけるためのアイキャッチャーという性格も持つので、見出しだけからも、かなり興味深い傾向を見出すことができる。

なお、ビルマ人の名前には「姓」がなく「アウンサンスーチー」で一つの「名」である。が、新聞では「スーチー」がしばしば用いられているので、それに従った。また各紙ごとに、「アウン・サン・スーチー」「スーチー」「スーチー」などと表記の「揺れ」がみられたので、異表記を全て検索条件に入れた上で、本稿では「アウンサン・スーチー」ないし「スーチー」で統一した。

表3は、三紙別に、見出しにおいて「スーチー」のあとに付されていた「女史」「書記長」「氏」「さん」「その他」の敬称の数を、各年の上期と下期の半期ごとにあらわしたものである。名前のみで敬称も肩書きもつけられていない「敬称なし」については、「その他」にカウントしてある。

この表3に示したように、年譜と、見出しにスーチーが登場した記事の合計数の推移とを重ねてみると、おおむね、何らかの事態や事件が生じた際に、各紙ともに取り上げて報道する傾向が読み取れる。ノーベル平和賞受賞(九一年下期、三紙合計で一二一件)、軍事政権との対話(九四年下期、同八二件)、軟禁からの解放と記者会見(九五年下期、同二七〇件)、移動の制限(九六年上期、一三〇件)、再軟禁状態(九六年下期、二〇〇件)、再び軟禁からの解放(〇二年上期、九二件)、遊説中の襲撃と身柄拘束(〇三年上期、一一八件)、入院・手術と三度目の

表3 見出しにみるアウンサン・スーチーに対する敬称の推移

(単位：件)

時期区分	1988.7-12	1989.1-6	1989.7-12	1990.1-6	1990.7-12	1991.1-6	1991.7-12	1992.1-6		
	スーチーのトビックス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・50万人集会で演説</li> <li>・クーデターによる軍事政権誕生</li> <li>・NLD設立、書記長に</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅軟禁</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総選挙によりNLD大勝</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・NLD書記長解任</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サハロフ賞受賞</li> <li>・ノーベル平和賞受賞</li> </ul>
朝日	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	4	4	11	4	2	1	19	3	
	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	4	1	6	4	2	1	2	2	
毎日	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	4	2	6	3	6	3	30	6	
	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	4	2	6	3	6	3	8	8	
読売	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	11	1	9	8	2	2	39	12	
	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	1	1	1	1	1	1	1	2	
3紙合計	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	19	6	26	15	10	6	88	21	
	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	1	0	0	0	0	1	0	0	
	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	1	1	0	0	0	0	28	20	
	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	1	1	0	0	0	0	3	2	
	女史 書記長 呼び方 氏 さん その他 合計	22	8	26	15	10	7	121	44	

時期区分	1992.7-12	1993.1-6	1993.7-12	1994.1-6	1994.7-12	1995.1-6	1995.7-12	1996.1-6																		
スピーチのトピックス		<ul style="list-style-type: none"> <li>歴代ノーベル平和賞受賞者が解放を求める声明</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>国民会議による新憲法制定作業</li> <li>国軍高官と面会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>軟禁5年目</li> <li>軍事政権トップと対話、テレビ放映も</li> <li>国連高官が軍事政権と対話</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>期限切れ後も軟禁継続</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>軟禁から解放、自宅で記者会見</li> <li>ACEAN会議</li> <li>NLD書記長に</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>移動の制限</li> <li>NLD 党員の拘束</li> </ul>																		
									1	1	3	20	22	21	83	29										
									1	12	7	20	22	21	83	29										
									1	1	10	20	22	21	84	31										
									合計	5	14	10	20	22	21	84	31									
									朝日		<ul style="list-style-type: none"> <li>女史書記長</li> <li>呼び方</li> <li>氏</li> <li>さん</li> <li>その他</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2</li> <li>1</li> <li>7</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>17</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>26</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1</li> <li>16</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5</li> <li>92</li> <li>6</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>10</li> <li>1</li> <li>32</li> <li>29</li> </ul>									
																		5	5	5	17	26	16	92	29	
																		5	10	5	17	26	17	103	72	
																		合計	5	10	5	17	26	17	103	72
																		読売		<ul style="list-style-type: none"> <li>女史書記長</li> <li>呼び方</li> <li>氏</li> <li>さん</li> <li>その他</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>10</li> <li>1</li> <li>1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>13</li> <li>1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>31</li> <li>3</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>9</li> <li>4</li> <li>1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>20</li> <li>1</li> <li>62</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>20</li> <li>10</li> <li>1</li> <li>88</li> <li>31</li> </ul>
4	4	4	13	31	9	20	0																			
4	10	4	13	31	9	20	10																			
合計	4	10	4	13	31	9	20	10																		
3紙合計		<ul style="list-style-type: none"> <li>女史書記長</li> <li>呼び方</li> <li>氏</li> <li>さん</li> <li>その他</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>13</li> <li>2</li> <li>20</li> <li>1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>13</li> <li>1</li> <li>37</li> <li>0</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>31</li> <li>0</li> <li>0</li> <li>0</li> <li>51</li> <li>0</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>9</li> <li>0</li> <li>1</li> <li>1</li> <li>41</li> <li>1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>21</li> <li>5</li> <li>1</li> <li>237</li> <li>6</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>0</li> <li>10</li> <li>1</li> <li>88</li> <li>31</li> </ul>																		
									0	0	0	0	0	0	5	10										
									1	2	3	1	0	1	1	1										
									8	20	12	37	51	41	237	88										
									0	1	0	0	0	1	6	31										
									合計	14	36	19	51	82	52	270	130									



時期区分	2000.7-12	2001.1-6	2001.7-12	2002.1-6	2002.7-12	2003.1-6	2003.7-12	2004.1-6
スリーチーの トビックス	28	13	7	25 5 1	11	52	42	7
	28	13	7	31	11	52	42	7
朝 日	28	13	7	31	11	52	42	7
	28	13	7	31	11	52	42	7
毎 日	1 29	7	4	1 23	1 12	1 5 26 1	2 12 26	2 2 3
	30	7	4	24	13	33	40	5
読 売	22	8	7	1 34 2	1 10	32	26	7
	22	8	7	37	11	33	26	7
3紙合計	0 0 1 79 0	0 0 0 28 0	0 0 0 18 0	0 0 27 62 3	0 0 13 22 0	1 1 57 58 1	0 2 54 52 0	0 0 9 10 0
	80	28	18	92	35	118	108	19



時期区分	2008.7-12	2009.1-6	2009.7-12	2010.1-6	2010.7-12	2011.1-6	2011.7-12	2012.1-6
スリーチーのトピックス	• 軟禁に抗議して食料受け取り拒否	• 「国家転覆防衛法」違反で起訴、裁判開始 • 訴自交対、解放を求める • 声明相次ぐ	• 国家転覆の罪で実刑言い渡し後、執行猶予と特赦 • 自宅軟禁	• 年内総選挙のための閣連法制定、NLDは総選挙不参加 • NLD政党資格を失う	• 2年ぶりの連判議院総選挙 • 7年半ぶりに解放 • NLD本部前で演説、4万人参加	• 新政府設立 • スリーチーに政治活動停止を通告、スリーチーと会談	• NLD、政党として再登録 • 連判議院候補選に立候補表明	• NLD中央執行委員会議長に • ヒカマ連判議院候補久選挙にNLDより立候補し、当選
	朝 日 呼 び 方 氏 さん その他	7 2	3 33	3 47	7 10	9 21	3 4	14 10
合 計	9	36	50	17	30	7	24	38
毎 日 呼 び 方 氏 さん その他	7	2 27	3 39	13	35	11	46	46 20
	合 計	29	42	13	35	11	46	66
読 売 呼 び 方 氏 さん その他	9	19 1	44	15 2	31	9	30	27 14
	合 計	20	44	17	31	9	30	41
3紙合計	女史 書記長 呼 び 方 氏 さん その他	0 0 7 18 0	0 0 5 79 1	0 0 6 130 0	0 0 9 87 0	0 0 3 24 0	0 0 14 86 0	0 0 106 36 3
	合 計	25	85	136	47	96	27	100



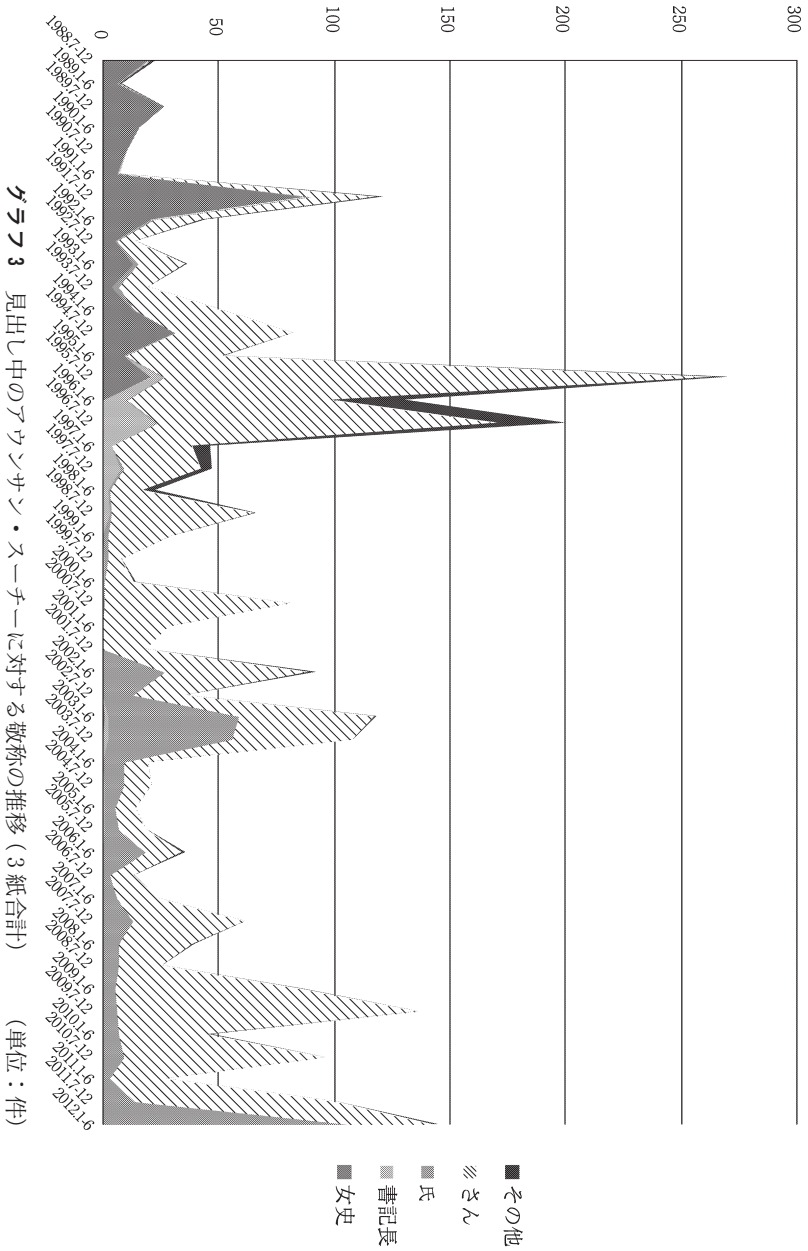
軟禁（〇三年下期、一〇八件）、国家転覆防御法違反による起訴（〇九年以上期、八五件）、同法違反による実刑判決・執行猶予と軟禁（〇九年下期、一三六件）、七年半ぶりの解放と NLD 本部前での演説（一〇年以上期、九六件）、そして民主化ともに行われた国会議員の補欠選挙への立候補（二一年下期、一〇〇件）と当選（二二年上期一四五件）といったように、ドラマチックな展開があった際に、三紙合わせて八〇件から一〇〇件を超えるスリーチー名を見出しに掲げている。

(5) **アウンサン・スーチーに付された敬称に関する三紙合計の動きと特徴**

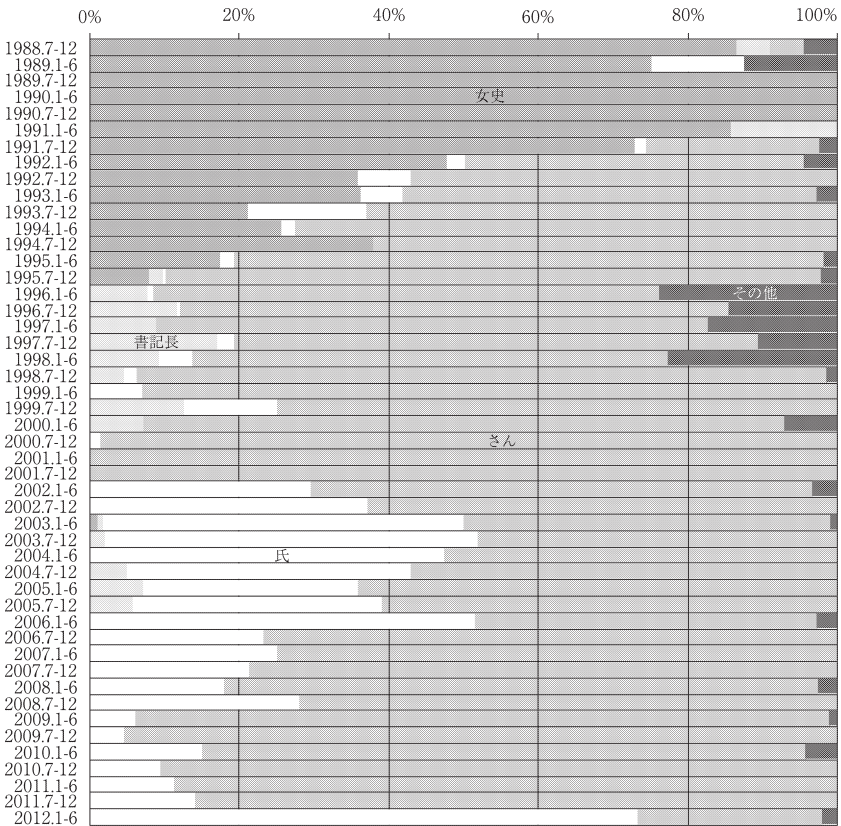
グラフ 3 は、三紙を合計したスーチーに対する敬称別積み上げグラフである。また、同一のデータを、各時期を一〇〇％として、比較帯グラフであらわしたものがグラフ 4 である。三紙全体の見出しにあらわれたスーチーに対する敬称がどのようなトレンドとなっているのかをグラフ 3 によって、また各時期に、各敬称がどれくらいの比率を占めていたのかをグラフ 4 によって、それぞれ把握することができる。

グラフ 3 と表 3 によると、ノーベル平和賞受賞が報じられた一九九一年下期がスーチーに対する「女史」という敬称使用の第一回目のピークとなっており、三紙合計で全二二一件の見出し中八八件、比率にして全体の七二・七％を「女史」のついた見出しが占めていた。それに対し、「さん」は二八件（二三・一％）、また「氏」は二件（一・七％）にとどまっている。グラフ 4 の比較帯グラフでみると、調査開始時の八八年下期から九一年下期まで、「女史」の占める割合が毎回六割以上に達していたことがわかる。

その後、九五年七月に自宅軟禁から解放されたことにより、スーチーに関する報道が一気に増えたが、九五年下期に、調査期間中最も多い二七〇件も見出しが紙面に踊ることとなった。そのうちの二三七件（八七・八％）と



大多数が「さん」という呼称を用いており、「女史」がつけられた見出しは二一件(七・八%)と激減している。そして次の九六年下期の第二のピーク時には、二〇〇件中「さん」が一四七件(七三・五%)に対して「女史」の見出しはゼロとなっている。ここでは「書記長」が二三件(一一・五%)、「その他」が二九件(一四・五%)みられるが、それは、後述するように、毎日が「書記長」という「肩書き」つきの見出しを多用したという理由と、同紙で、タイトルにスーチャーの名を敬称なしで配した連載記事が続いていたのが「その他」に分類された



グラフ 4 見出し中のアウンサン・スーチャーに対する敬称の推移 (3紙合計) (単位: %)

という事情による。グラフ4からは、「女史」が九一年下期以降漸減してゆき九六年以上期には皆無となって、「さん」が主流となり、同時期から九八年以上期あたりまでのしばらくの間「書記長」と「その他(敬称なし)」がおのおの二割程度を占めた時期があったことがわかる。

その後、グラフ3にみるように九八年前期から見出し数は増減を繰り返す傾向がみられるが、グラフ4から明らかのように、その敬称は「さん」がほとんどで、九八年前期あたりから二〇〇一年下期までの数年間は、ほぼ一〇〇%近くを「さん」が占める状態が続いた。

スーチーが出現する見出しに、「氏」が目に見えて使われ出すのは、〇二年前期からである。この年、全九二件中二七件、二九・三%が「氏」となったのを皮切りに、見出しの総件数が経年により上下するのとはほぼ同様の動きを「氏」の増減が示す期間が、〇八年前期くらいまで続く。同時期に三〜五割近くを「氏」が占めるに至っていることが、グラフ4からもみて取れる。この時期「氏」のシェアが高くなっているのは、このあと各紙別に分析する(6)節で述べるように、朝日が同時期に、スーチーに関する記事の見出しに「スーチー氏」という呼び方を比較的小く用いていたからである。

しかしながら、〇九年前期あたりから以後、グラフ3に明らかのように、「氏」という見出しの増減が見出し総件数の動きと比例するような動きはなくなり、「さん」は増減しても、「氏」は常時ひとケタ台でほとんど動きがみられなくなった。グラフ4からも、「氏」は一時期よりその比率を減らしていき、ふたたび「さん」が敬称の主流になっていくさまがみて取れる。「スーチー氏」が、そのまま増えるかにもえたのだが、それは必ずしも定着しなかったのである。

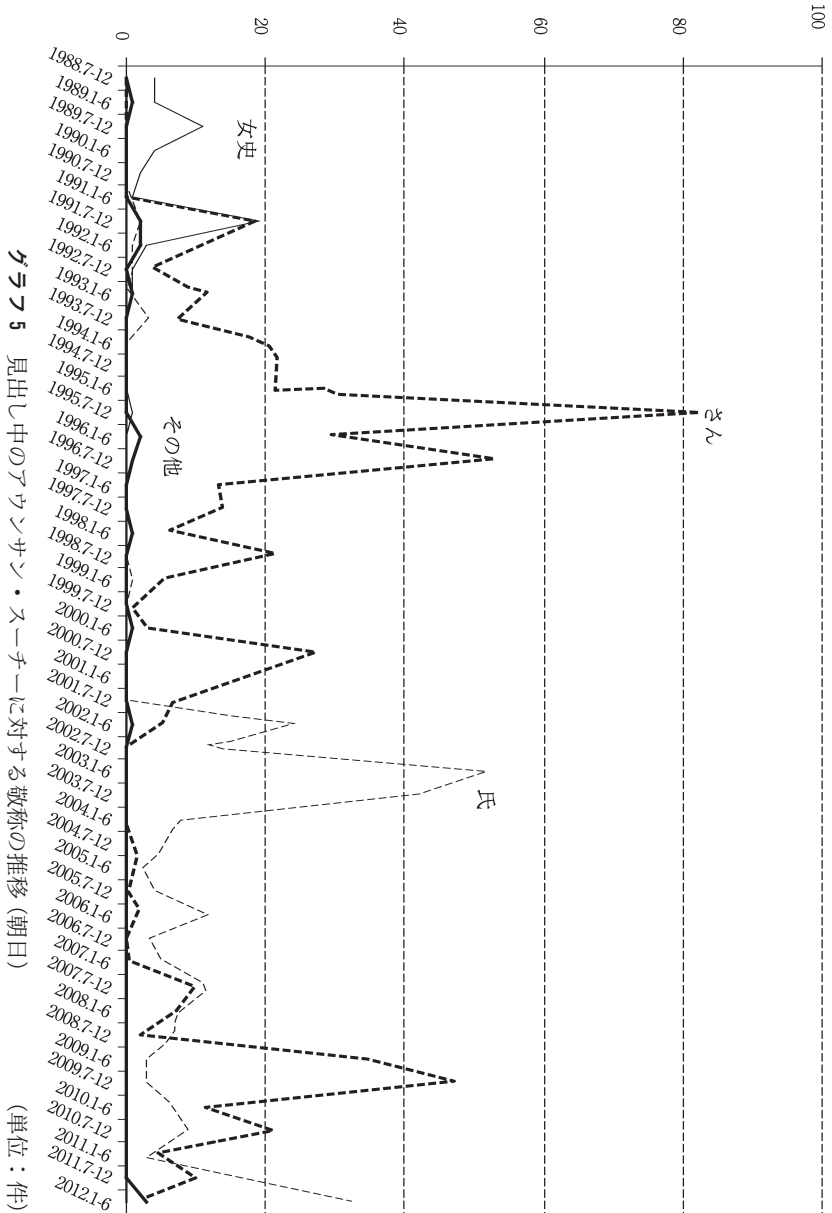
このように、【八〇年代後半〜九〇年代前半】「女史」↓【九〇年代後半】「さん」と「書記長」「その他(敬称

なし)】↓【ミレニアム前後Ⅱ「さん」】↓【二世紀前半Ⅱ「氏」と「さん」】↓【二〇一〇年前後Ⅱ「さん」】へと敬称がその都度変化してきたわけだが、ビルマの民主化が進み、スーチーが国会議員の補欠選挙に立候補することが取り沙汰されるようになった二〇一一年下期には、表 3 に示したように「氏」が二桁台の一四件へと増加し、一二年四月に国政選挙の補選が行われ、拘束を解かれて政治活動を再開したスーチーが当選した一二年上期には、グラフ 3 から明らかのように、「氏」の件数と比率が急激にはねあがって、表 3 とグラフ 4 にみるように、全一四五件中一〇六件(七三・一%)と、四分の三を占めるに至った。

(6) **アウンサン・スーチーに付された敬称に関する各紙ごとの動きと特徴**

ここで、スーチーに対する呼称の使われ方とその推移の各紙ごとの特徴をみておこう。表 3 およびグラフ 5、7 からは、「女史」という語がいつまで使用されていたか、「さん」がいつまで使用され、「氏」がいつごろからどれくらい使われ出したか、各紙の特徴が浮かび上がってくる。

まず朝日は、グラフ 5 にみるように、当初「女史」の見出しがほとんどであったが、ノーベル賞を取った一九九一年下期には「さん」が初めて登場し、「女史」と同数の一九九一年下期の朝日全体の四五・二%を数えるようになった。その後「女史」は数を減らし、九三年上期には皆無となり、九五年下期に一回再登場したものの、以後見出しには全く使われなくなっている。それとは対照的に、「さん」は、九五年下期に八三件と、使用件数のピークを迎えつつ、増減しながらも、二〇〇一年下期までは、ほぼ一〇〇%近くの独占的な敬称となっていた。これに対して、「氏」という敬称がスーチーの見出しにつけられることは、表 3 の数値の推移をみても明らかなおり、八〇年代九〇年代を通じてゼロ件から三件で、ほとんどなかった。すなわち、女性にのみ付される敬称として



の「女史」が、男性の著名人に付されることの圧倒的に多い「氏」ではなく、それとは異なった、より「くだけた」敬称である「さん」に置き換わったのである。

「氏」がスーチーに対して用いられる敬称の主流となるのは、〇二年に入ってからのことである。同年上期に突然二五件出現するのを皮切りにして、〇三年上期は五二件の見出し中五二件、同下期は四二件中四二件と、全ての見出しの敬称は「氏」となった。以後も、記事数は少ないながら、〇八年下期のあたりまで、「氏」がコンスタントに使われる時期が続く。これは、朝日新聞が、ジェンダーの視点を持って記事表現を行うことを、紙面上で「宣言」したことと無関係ではなさそうである。

二〇〇二年二月一日づけの朝日は、「『性差』敏感な議論を」と題して、委嘱した社外委員による「報道と人権委員会」の定例会について詳細に報じている。ここでは、ジェンダー・ステレオタイプにもとづいたイラストや記事表現、死亡記事における男性は「氏」女性は「さん」の敬称の使い分け、統計表記などで女性を「(うち女性\*人)」と、内数扱いする書き方、女性の姓ではなく名を出す見出し表現、「家内」など対称語のない語などについて、委員が批判的な議論を行っている。さらに、新聞週間期間中の一月一三日の紙面では、「紙面をジェンダーの視点で」との見出しを掲げ、死亡記事の敬称を女男とも「さん」に統一するなど、社内「取り決め集」を改訂したことを大きく記事化している。朝日のこうした内外へのジェンダー表現への取り組みの姿勢の表明が、紙面にも反映したのが、スーチーにおける「氏」使用へのシフトではなかったかと考えられる。

その後、「氏」の敬称が見出しに使われる期間は二〇〇八年まで続いたが、グラフ 5 に明らかのように、〇九年上期からは再び「さん」が「復活」し、一一年上期まで「さん」が「氏」を上回る「逆転現象」の時期に戻ってしまった。表 3 のデータをみると、〇九年上期は全三六件中三件、同下期は全五〇件中三件と、「氏」の割合が極端

に減っている。どうやら月日が経つにつれ、内外に「宣言」した「ジェンダーの視点」についての社内の雰囲気は稀薄化してしまったらしい。ジェンダーの視点をもった取材や表現については、後退しないよう常に点検し、注意を喚起しておく必要があるという「教訓」を、この事態は示しているといえないだろうか。

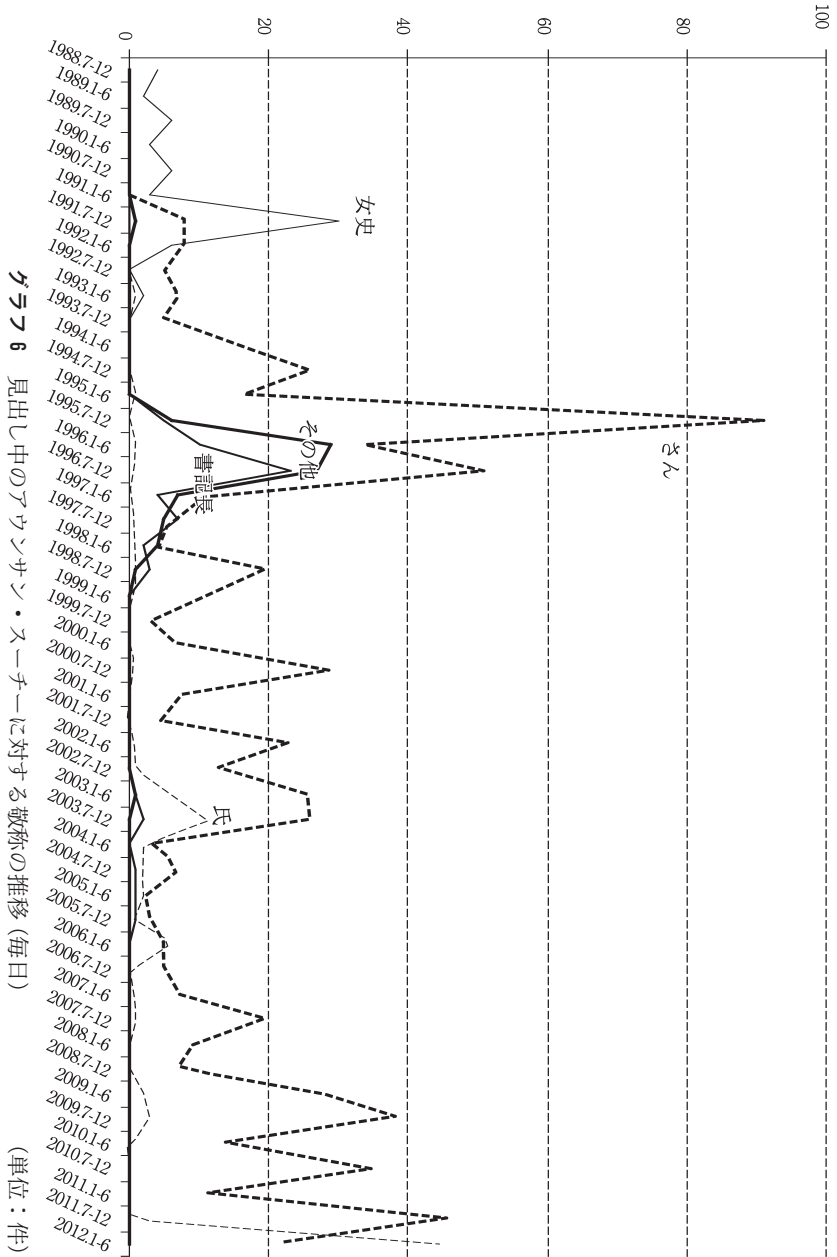
しかしながら、二〇一一年下期、前の(5)節における三紙合計の分析でふれたように、スーチーが国会議員選挙の補選に立候補を表明する頃から「氏」の使用が再びみられるようになる。そして実際に立候補して当選した一二年上期には、三八件中三三件と、九割近くが「氏」という敬称の付された見出し構成となっている。

次に毎日は、グラフ6に示したように、当初「女史」だけが使用され、ノーベル賞受賞時の一九九一年下期の三〇件を最多に、九二年上期まで使われていた。しかし、九三年上期に二件登場して以降は、現在に至るまで一度も使われていない。また朝日と同じ九一年に、「女史」と入れ替わるように「さん」が初めて登場し、それ以来「さん」は漸次増えてゆき、九五年下期に九二件と最多を数えるようになる。それ以後、「さん」は増減を繰り返しながら、一九九〇年代、二〇〇〇年代を通じて、見出しにおける敬称の主流として長らく使われ続けてきた。

毎日の場合、女性に対して「氏」という敬称が見出しで用いられるようになるのは、九三年の一件が最初のことであるが、以降も「氏」は、ほぼ毎年一件使われているのみで、量的増加の傾向は全く示していない。わずかに〇三年上期に五件、同年下期に一二件みられたが、その後は二件程度で推移したのち、〇六年上期に六件登場しただけである。

毎日のもう一つの特徴は、九五年下期から九八年下期に至るまでの期間、スーチーが国民民主連盟(NLD)で務める「書記長」という役職名が、スーチーへの敬称として多用されていることである。さらに、ほぼ同期間に「その他」の呼称が使われているのが目立つが、これは、同紙に「ビルマからの手紙」および「新ビルマからの手





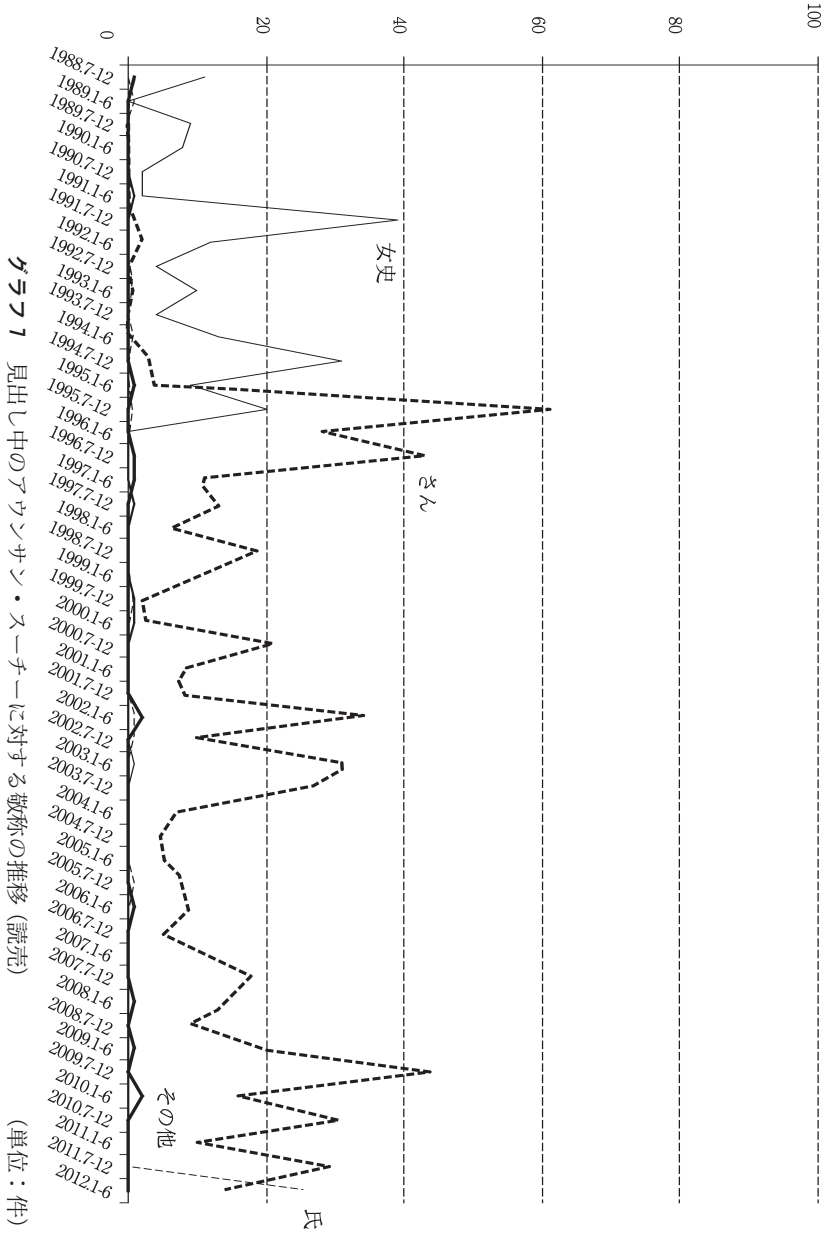
紙」という長期連載記事が掲載されて、そのタイトルに毎回「アウンサンスーチー」という「敬称なし」の名が記載されていたことによる。表3のデータからわかるように、「さん」のつく見出しが全体の四〇九割を占めつつ、次に多いのが、「氏」ではなく、「敬称なし」か「書記長」と書かれた見出しであるという期間が数年続いた。しかし、肩書きによる見出しづけも、その後定着はしていない。

このように、毎日の場合、「氏」という敬称はほとんど使われてこなかったわけだが、一二年上期、スーチーが補選に立候補し、当選した時期にあたる見出し群に、それまではほとんどみられなかった「氏」が突如大量に出現し、全六六件のうちの四六件、七割を占めるところとなり、「さん」を上回った。

最後に読売は、グラフ7に掲げたように、一九八八年下期の初出で一四件中二一件が「女史」という敬称を使っており、八九年上期を除いて八九年下期以降もコンスタントに「女史」の見出しがみられるのが大きな特徴である。他紙と同様、九一年下期に最多となったが、このときは「女史」の使用が、朝日では全体の半分弱、毎日では全体の八割弱だったのに対し、読売は、四〇件のうち三九件と、ほぼ一〇割近くを占めていた。

さらに、読売の場合、九三年下期から「女史」が皆無となった毎日や、同じく九三年下期から「女史」がほとんどみられなくなった朝日（九五年下期に一件のみ）の両紙とは異なり、表3から確認できるように、九五年下期までの比較的長い期間にわたって、しばしば二桁台にわたる「女史」の見出しが使われていた。

その後「女史」は使われなくなったが、表3にみられるように、二〇〇三年上期に一件再登場する。これは、六月一六日に、「ミャンマー スー・チー女史の解放が先決だ」という見出しの社説が掲載されたためである。他紙に遅れはしたが自紙も七年前に使うのをやめた「女史」という敬称を、新聞の公的な「顔」であるとされる社説の見出しに「復活」させること自体、アナクロニズムというべきであろうが、社説本文をみても、「スー・チー女史」



が七カ所、また、単独の「女史」が七カ所で使われていた。読売もこの時期には「さん」という敬称使用が常態化している中、内部的チェックは働かなかつたのだろうか。

読売で「さん」が目立つようになるのは九四年下期からで、この時期はまだ「女史」の数が上回ったものの、九五年下期からは二〇件の「女史」に対して六二件の「さん」と逆転し、九六年上期に「女史」が皆無になって以降、グラフ7と表3からわかるように、「さん」づけの見出しがほとんどを占めるようになってゆく。

一方、スーチー「氏」については、読売では、当初からほとんど使用されておらず、数年に一件みられる程度であったが、〇六年上期から一一年下期までの長きにわたり、「氏」のつく見出しは皆無であった。その傾向にくさびを打ったのは、やはり一二年の国政の補選で、それまでみられなかったスーチーに対する「氏」の敬称が、一二年上期には二七件へとはね上がった。これは、全四一件のうち、七割弱に相当する。

ただし、この当選報道にあたって、「氏」を見出しに使い出した時期を各紙で細かくみてみると、朝日・毎日が、一二年四月一日に行われたビルマ国政補選の結果が報じられた二日付朝刊一面で、それぞれ、「スーチー氏当選へミャンマー補選 野党圧勝の勢い」「ミャンマー…補選、NLD『40人当選』スーチー氏、勝利宣言」と見出しを掲げていたのに対し、読売だけは一面見出しが「スーチーさん圧勝 NLD集計 ミャンマー補選 民主化への節目」と、「さん」づけであった。読売の見出しで初めて「氏」がスーチーにつけられて登場するのは、その後、四月一日になってからのことである。

以上をまとめると、各紙で「女史」という敬称が「化石化」して行ったのとほぼ比例する形で、スーチー「さん」へと変化し、全体的には「さん」づけが定着していった。読売は比較的後年まで「女史」の見出しを使用しており、また朝日では一時期「氏」が使われたものの、完全には定着しなかった。三紙における「女史」からの、

「氏」ではない「さん」への移行は、「女と男は分けて呼ぶのが当然」という自明性への気づきがなかったことを物語っている。

ところが、すでにみたように、二〇一二年にスーチーが連邦議員の補欠選挙に立候補して当選すると、急ぎの新聞も「さん」に替えて「氏」を使い出した。このことは、スーチーが在野の民権活動家から国会議員になり、政治家としての「格」が上がったといった理由によるのだろうか。

なお、最後に付言しておく、アウンサン・スーチー関連の記事においては、見出しと本文とで異なる敬称が使用されることがある。たとえば、二〇一一年一月一九日の朝日朝刊における、翌年の国政補欠選挙にスーチーが出馬することを報じる記事では見出しに「氏」が用いられていたのだが、本文では一貫して「さん」がつけられていた。同じ記事であっても、記事の「顔」である見出しには公的な印象の「氏」の敬称をつけ、記事本文にはくだけた印象の「さん」をつける揺れがあること自体、興味深い現象であるが、今回は見出しにおける敬称使用に限って論を進めた。

#### 4 ノーベル平和賞受賞者への敬称使用にあらわれたダブルスタンダード

##### (1) 一九九一年以降にノーベル平和賞を受賞した女性と男性

これまでは、新聞における女性への扱いがどのようなものであるのかを、日本でも知名度の高いアウンサン・スーチーに対する敬称の用いられ方とその変遷からみてきた。

本章では、スーチーだけでなく、政治の分野で活躍する女性、民主化や環境問題など社会運動の現場で活躍する

女性、学問や科学技術の分野で功績を挙げた女性、芸術や文芸の分野で優れた作品を創造した女性など、メディアに取り上げられることの多い著名な女性に対する新聞の扱いが、男性へのそれと同等のものであるかどうかを、ノーベル平和賞受賞という同じ荣誉に浴した女性と男性に付された敬称の異同から比較してみたい。

ここでも、新聞記事データベースを用いて、ノーベル賞受賞者が取り上げられている朝日・毎日・読売三紙の記事を系統的に集め、敬称のつけられ方について集計を行う。物理学賞、医学・生理学賞、化学賞、文学賞、経済学賞、平和賞と六部門あるノーベル賞全体では記事の数が膨大となるため、受賞者の中の女性の比率が最も高く、したがって経年的な変化も観察しやすい、ノーベル平和賞についてみていきたい。

調査期間は、当初、本研究会が調査を開始した一九八五年から現在までを別途としたが、女性の受賞者に比して男性の受賞者が多くバランスに欠け、また、検索件数が膨大な数にのぼることが判明した。そのため、調査年をアウンサン・スーチーが受賞した一九九一年以降から二〇一一年までの二年間にしぼり、かつ毎年ノーベル平和賞が発表される一〇月の発表時よりその年の一月三十一日までを調査の期間とした。データベース検索を、ノーベル平和賞発表時からその年の年末までに限ったのは、そうしないと受賞年が早い人ほど、一年までの報道データがより長期間累積されてしまい、各人を同等に比較することができないからである。

その結果、表4と表5に示したように、対象となる女性は八名、男性は一九名となった。人権活動や民主化運動を担う社会運動家、平和に貢献した大統領、首相、大臣、議長などが目立つ。この間のノーベル平和賞受賞者には、表4・表5の下に注として記したように、「国境なき医師団」のような組織、また「地雷禁止国際キャンペーン(ICBL)」のような個人と一緒に受賞した団体が、合計七件含まれていたが、ここでは個人の受賞者に付された敬称をみるのが目的であるので、これらの団体は分析対象から除いた。

表4 ノーベル平和賞受賞者のプロフィール(女性)

受賞年	名前	国	職業(受賞時)	受賞理由
1991	アウンサン・スーチー	ビルマ	社会運動家・前全国民主連盟(NLD)書記長	民主化のための非暴力の闘い
1992	リゴベルタ・メンチュ	グアテマラ	農民統一委員会(CUC)活動家	先住民族の文化の擁護と地位向上に貢献
1997	ジヨディ・ウイリアムズ	米国	NGO「地雷防止国際キャンペーン(CICBL)」代表	地雷防止条約の国際キャンペーン(CICBL)の功績
2003	シリントン・エバディ	イラン	弁護士・人権活動家	民主主義および女性と子どもの人権擁護に貢献
2004	ロンガリ・マータイ	ケニア	ケニア環境副大臣	人権や女性の権利を尊重した環境保護の活動
2011	エレン・サーリーワリーマ・ボウイー	リベリア	平和活動家・WIPSENAfrica 事務局長	女性が平和や民主化に大きな力を発揮することに貢献
	タラックル・カルマン	イエメン	人権活動家・ジャーナリスト	女性が平和や民主化に大きな力を発揮することに貢献

表5 ノーベル平和賞受賞者のプロフィール(男性)

受賞年	名前	国	職業(受賞時)	受賞理由
1993	ウイレム・デクラーク ネルソン・マンデラ	南アフリカ 南アフリカ	南アフリカ大統領 アフリカ民族会議(ANC)議長	アパルトヘイト政策を廃止 アパルトヘイトを最終させ民主的南アの基礎を築いた
1994	ヤセル・アラファト シモン・ペリス	パレスチナ イスラエル	パレスチナ解放機構(PLO)議長 イスラエル外相	イスラエルとの対話により中東の和平を進めた オスロ合意など中東との和平を進めた

1995	イツハク・ラビソ ジョセフ・ロートブラット	イスラエル ポーランド (英国)	イスラエル首相 パゾウォツシユ会議会長	オスロ合意など中東との和平を進めた 核兵器削減に貢献
1996	カルロス・(フイリペ・ シメネス) ペロ ラモス・ホルタ	東テイエモール	東テイエモール民族抵抗評 議会代表 社会民主労働党(SDLP) 党首	東テイエモールの紛争の平和的解決に尽力 東テイエモールの紛争の平和的解決に貢献
1998	ジョン・ヒューム デビッド・トリソブル	北アイルランド 北アイルランド	北アイルランド自治政府 首相	北アイルランドの和平に貢献 北アイルランドの和平に貢献
2000	金大中	韓国	韓国大統領	大陽政策と南北首脳会談など朝鮮半島の和平に尽力
2001	コフイー・アナン	ガーナ	国連事務総長	国連事務総長として卓越した功績を残した
2002	ジミー・カーター	米国	元アメリカ合衆国大統領	退任後に国際紛争解決への努力と民主主義と人権を拡大
2005	モハメド・エルバラダイ	エジプト	国際原子力機関(IAEA) 事務局長	原子力エネルギーの平和利用に貢献
2006	ムハマド・ユヌス	バングラデシユ 米国	グラミン銀行総裁	貧困層の経済的・社会的基盤を築いた
2007	アル・ゴア	米国	前アメリカ合衆国副大統領	地球温暖化問題を知らしめ処置の基盤を築く努力
2008	マルティン・アハティサーリ	フィンランド	元フィンランド大統領	アチェ合意など世界各地の紛争解決に尽力
2009	バラク・オバマ	米国	アメリカ合衆国大統領 著作家・社会運動家	国際的外交と民族間強力のための努力 中国の人権確立のための非暴力の闘い
2010	劉曉波	中国		

注：1995年にはロートブラットとともにパゾウォツシユ会議が、1997年にはウイリアムズとともに地雷禁止国際キャンペーン(ICBL)が、1999年には国境なき医師団(MSF)が、2001年にはアナンとともに国際連合が、2005年にはエルバラダイとともに国際原子力機関(IAEA)が、2006年にはユヌスとともにグラミン銀行が、2007年にはゴアとともに気候変動に関する政府間パネル(IPCC)が、それぞれ組織として受賞している。



調査対象とする女性と男性の受賞者を決定した上で、朝日・毎日・読売の各データベースを用い、受賞者の「名前」と「ノーベル」という語の両方が記事に含まれるという検索条件で、記事中（見出しを含む）の名前とそれに付された敬称を出力し、カウントした。ここでの単位は、これまでのように、見出し件数でも、また記事件数でもなく、「登場した名前＋敬称」の数、つまり「延べ語数」である。

「ノーベル」を検索条件に加えたのは、受賞者の名前だけで検索すると件数が非常に多くなり、また、ノーベル賞とは無関係の記事がノイズとして入ってくるためである。また、受賞者の名前には、たとえば「エバデー」と「エバデイ」のように表記の揺れがあるため、検索条件には異表記も網羅した。

検索の結果、敬称のつけ方にある種のパターンがみられることがわかったので、それらを整理し、姓名と敬称の組み合わせとして、①姓名＋氏、②姓＋氏、③姓名＋さん、④姓＋さん、⑤名＋さん、⑥姓名のみ、⑦姓のみ、⑧名のみ、⑨姓名＋肩書き（職業や所属など）、⑩姓＋肩書き、⑪姓名＋女史、⑫姓＋女史、の二通りのパターンを用いて分類することにした。男性の受賞者の場合には、女性にみられた⑧「名のみ」と⑪「姓名＋女史」⑫「姓＋女史」にあたる呼び方が一件もみられなかったため、実際には、①から⑦および⑨⑩の九通りのパターンとなった。

(2) 一九九〇年代における女性の平和賞受賞者——アウンサン・スーチー、メンチュ、ウイリアムズ

まず、一九九一年に受賞したアウンサン・スーチーについて、三紙ごとの敬称のパターンとその登場件数を示したが、表 6 である。

既にふれたように、ビルマ人の名前は「姓」がないため、「アウンサンスーチー」全体が「名」であるが、日

表 6 スーチーの呼び方 (延べ語数)

(単位: 件)

1991年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
アウンサン・スーチー氏 スーチー氏	2 2			2 2	4	1.1%
アウンサン・スーチーさん スーチーさん	16 35	12 31	1 11	29 77	106	28.6%
アウンサン・スーチー スーチー	2 2	4 3		6 9	15	4.1%
アウンサン・スーチー+肩書き スーチー+肩書き	1 1			1 1	2	0.5%
アウンサン・スーチー女史 スーチー女史	13 24	25 53	39 89	77 166	243	65.7%
合 計	98	128	144	370	370	100.0%

本のメディアでは略称の「スーチー」がかなり一般的に用いられている。一九九六年七月一日の毎日新聞は、「アウンサンスーチー」を正式の表記とするが、「スーチー」という略記も用いる旨を告知している<sup>(9)</sup>。本稿でも毎日の扱いにほぼ準じて、「アウンサン・スーチー」および「スーチー」を用いる。なお、新聞によって「アウンサン・スーチー」や「アウンサン・スーチー」、「アウン・サン・スーチー」などと記載の方法に「揺れ」が生じていたので、「アウン・サン」は「アウンサン」として、また「スーチー」という表記も「スーチー」として、統一して扱った。

その結果、三紙合計で三七〇件のスーチー関連の敬称がみられ、そのうち「スーチー女史」が一六六件(四四・九%)、「アウンサン・スーチー女史」が七十七件(二〇・八%)と、「女史」のつく語が合計二四三件(六五・七%)を占めた。スーチーが三回出てくるうちの二回に、「女史」と記述されている計算である。次いで多いのが、「スーチーさん」七十七件(二〇・八%)と「アウンサン・スーチーさん」二九件(七・八%)で、合わせて一〇六件(二八・六%)が「さん」の扱いであった。それに対し、「氏」は合計四件(一一・一%)にとどまっている。

次に新聞による違いをみてみると、読売では、「スーチャー女史」が全一四四件中八九件（読売合計の六一・八％）、「アウンサン・スーチャー女史」が三九件（二七・一％）、両方を合わせると一二八件（八八・九％）と、「女史」の占める割合が約九割に達している。また、毎日では全一二八件中「スーチャー女史」五三件（毎日合計の四一・四％）、「アウンサン・スーチャー女史」二五件（一九・五％）と、読売ほどではないものの、両方で七六件（六〇・九％）が、「女史」扱いである。

一方、朝日では、登場件数全九八件中「スーチャー女史」が二四件（朝日合計の二四・五％）、「アウンサン・スーチャー女史」が一三件（一三・三％）で、「女史」は合計三七件（三七・八％）と、他の二紙に比べ、「女史」の使用頻度がかなり少なくなっている。朝日の場合はそれに代わって、「スーチャーさん」が三五件（三五・七％）、「アウンサン・スーチャーさん」が一六件（一六・三％）、両方合わせて五一件（五二・〇％）と、「さん」がよく用いられ、半数に達していた。また、朝日でのみスーチャーのあとに「氏」をつけたものが四件、「全国民主連盟前書記長」「NLD書記長」と、「肩書き」をつけたものが二件みられたのも特徴的である。

それにしてもこの時期、日本にも「フェミニズムの時代」が到来したとされていたにもかかわらず、「時代を一步（少なくとも半歩）」リードするとされる新聞が、女性が偉業をなすことを特別視するニュアンスの強い「女史」を、これほどまで多用していた事実には驚かされる。

次に、一九九二年に受賞したりゴベルタ・メンチュは、グアテマラ軍事政権下の人権侵害に反対する農民統一委員会（CUC）の活動家であり、受賞時には国連の「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を作成する部会のメンバーであった。本調査期間中に三紙合計で四八件登場しているが、表7にみるように、メンチュに対する呼び方は、「メンチュさん」と姓に「さん」をつける形が二一件（四三・七％）で最も多く、それにほぼ近い頻度の姓名

表7 メンチュの呼び方 (延べ語数)

(単位: 件)

1992年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合計	
リゴベルタ・メンチュ氏 メンチュ氏					0	
リゴベルタ・メンチュさん メンチュさん リゴベルタさん	4 5	9 6	7 10	20 21	41	85.4%
リゴベルタ・メンチュ メンチュ リゴベルタ	1	1 1		2 2	4	8.3%
リゴベルタ・メンチュ+肩書き メンチュ+肩書き					0	
リゴベルタ・メンチュ女史 メンチュ女史			1 2	1 2	3	6.3%
合計	10	17	21	48	48	100.0%

に「さん」をつける形の「リゴベルタ・メンチュさん」二〇件(四一・七%)と合わせると四一件の頻度となり、全呼称のうち八五・四%と、九割近くを占めることとなっている。

一方、スーチャーに多用されていた「女史」という敬称は、わずか三件(六・三%)を数えるに過ぎなかった。また、姓名および名のみ「敬称なし」は四件(八・三%)で、「氏」は一件もみられず、職業・役職等の肩書きをつける呼び方も皆無であった。

三紙別にみると、朝日では「リゴベルタ・メンチュさん」と「メンチュさん」を合わせて「さん」が全一〇件中九件(九〇・〇%)、毎日では全一七件中一五件(八八・二%)と、「さん」がおよそ九割を占めているが、読売で全二一件中一七件(八一・〇%)と、他二紙との間に比率にして約一割の開きがみられた。その分を埋めているのが、「リゴベルタ・メンチュ女史」一件、「メンチュ女史」二件、合計三件(一四・二%)の「女史」である。

以上でみたように、スーチャーの受賞時には七割近く使われていた「女史」が、わずか一年後であるにもかかわらず、激減し

表 8 ウィリアムズの呼び方 (延べ語数) (単位: 件)

1997年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
ジョディ・ウィリアムズ氏 ウィリアムズ氏		4 1		4 1	5	7.7%
ジョディ・ウィリアムズさん ウィリアムズさん ジョディさん	16 3 4	8 3	15 5	39 11 4	54	83.1%
ジョディ・ウィリアムズ ウィリアムズ ジョディ			1	1	1	1.5%
ジョディ・ウィリアムズ+肩書き ウィリアムズ+肩書き		2	3	5	5	7.7%
ジョディ・ウィリアムズ女史 ウィリアムズ女史					0	
合 計	23	18	24	65	65	100.0%

たのには、それなりの理由があると思われる。たとえば朝日は、一九九一年一月七日付けのメディア面で、「スー・チャー『女史』でいいの? 性別にはメリット」という記事特集しているが、ここでは、朝日も含めた各紙の「女史」と「さん」の使い方を調査し、性別を示すのにメリットはあるが、将来的には「さん」に統一した方がいいかもしれない、といった問題提起を行っている。また、その記事を受けて一月一四日付けの「声」欄では、「品位と温かさを失わぬ呼称に」とのタイトルで、読者から、「さん」では軽すぎ「女史」では性差別につながりかねず「むずがゆいものがあつた」との投書が寄せられた。朝日のメディア面のような、他紙の表現との比較も含めたこうした問題提起は、他の新聞の参考にも供されながら、業界としての雰囲気づくりをある程度醸成していったという側面もあるのではないだろうか。

一九九〇年代にノーベル平和賞を受賞した女性の三人目として、NGOの「地雷禁止国際キャンペーン」で日本でもよく知られる、九七年受賞の米国人、ジョディ・ウィリアムズについては、表8に示したように、調査期間中三紙合わせて六五件登

場している。全体で見ると、「ジョディ・ウィリアムズさん」と、姓名に「さん」をつけたものが最も多い三九件(六〇・〇%)、それに次いで「ウィリアムズさん」と、姓に「さん」をつけたものが一件(一六・九%)、「ジョディさん」のように、名に「さん」をつける呼称も四件(六・二%)みられ、「さん」づけが合計五四件、敬称全体の八三・一%を占めた。

また、ジョディ・ウィリアムズの場合、「氏」という敬称と、「ICBL代表」「代表」という「肩書き」による表記が、ともに五件づつ(各七・七%)みられたのが特徴的である。一方、「女史」という敬称は一度も使われておらず、以降、ノーベル平和賞受賞者の女性に「女史」は使われなくなった。いずれも社会運動家であるスーチー、メンチュ、ウィリアムズらであるが、「女史」一辺倒から「さん」へ、そして「氏」が登場するに及んで、九〇年代もようやく終わりに近づいて、表現のされ方が少しずつ流動化してきていることが読み取れる。

各紙ごとに見てみると、朝日二三件、毎日一八件、読売二四件の掲載件数中、三紙とも「ジョディ・ウィリアムズさん」という記載が一番多く、朝日で一六件(六九・六%)、毎日で八件(四四・四%)、読売で一五件(六二・五%)みられた。これに姓に敬称がつく「ウィリアムズさん」、名に敬称がつく「ジョディさん」を合わせると、「さん」の敬称使用は朝日二三件(二〇〇・〇%)、毎日一件(六一・一%)、読売二〇件(八三・三%)となる。「ジョディさん」と、姓ではなく名に「さん」をつける呼び方をしていたのは朝日のみの四件(一七・四%)であったが、これらは全て同一の社説の中で用いられていたもので、初出に「ジョディ・ウィリアムズさん」と呼ばれたあとは、一貫して「ジョディさん」と表記されていた。

また、毎日で「ジョディ・ウィリアムズ氏」が四件(二二・二%)、「ウィリアムズ氏」が一件(五・六%)と、「氏」の敬称が合計五件、二七・八%みられたのが特徴的だが、他紙では「氏」の使用は一件もみられなかった。

すでにみたように、新聞自体が、一九九一年に「女史」という敬称は一考した方がいと問題提起し、それに続けて投書欄に「さり」として『さん』では軽すぎる」という声を載せながら、九〇年代の終わりになると、結果として「軽い」とされた「さん」がノーベル賞受賞者の女性の敬称として定着していた事実は、前章のスーチーの見出し調査結果とも合致する。新聞は「女史」を卒業したものの、女性を、男性の「氏」とは異なる「さん」で呼ぶことの矛盾に、この時点ではまだ気づいていない。

(3) 二〇〇〇年代前半における女性の平和賞受賞者——エバディ、マータイ

二〇〇三年の受賞者であるイランの弁護士シリン・エバディは、ノーベル賞を授与された初めてのイラン人であり、かつ初めてのムスリム（イスラム教徒）女性の受賞者とされている。裁判官だったエバディは、一九七九年のイラン革命で失職（のちに弁護士となる）、厳格なイスラム法下での女性・子どもの地位や人権を守る運動をリードしたため、何度か逮捕されたりもした。ノーベル平和賞は、そのような活動が評価されて与えられた。エバディの名は、期間中一六七件みられ、日本における関心の高さがうかがえる。

表 9 に掲げたように、三紙合計では「エバディさん」と、姓に「さん」をつけた呼称が七〇件（四一・九％）、「シリン・エバディさん」と姓名に「さん」をつけたものが二四件（一四・四％）みられ、合計で九四件（五六・三％）と、「さん」が過半数を占めた。一方、これまでの女性の受賞者に比べ、エバディには「氏」がつけられることも多く、「エバディ氏」五八件（三四・七％）、フルネームの「シリン・エバディ氏」一三件（七・八％）を合わせると七一件（四二・五％）に達し、「さん」に迫る勢いであった。ちなみに、女性の受賞者に対して「氏」がつけられる割合は、このシリン・エバディと、のちに出てくるエレン・サーリーフの四割台が最も高く、必ずしも

表9 エバディの呼び方（延べ語数）

（単位：件）

2003年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合計	
シリン・エバディ氏 エバディ氏	33	13 24	1	13 58	71	42.5%
シリン・エバディさん エバディさん シリンさん	5	9 19	15 46	24 70	94	56.3%
シリン・エバディ エバディ シリン	1		1	2	2	1.2%
シリン・エバディ+肩書き エバディ+肩書き					0	
シリン・エバディ女史 エバディ女史					0	
合計	39	65	63	167	167	100.0%

定着したり、増えたりしているわけではない。

次に、新聞ごとの内訳をみると、「氏」に関しては、朝日は「エバディ氏」が三三件（八四・六％）、毎日は「シリン・エバディ氏」一三件（二〇・〇％）と「エバディ氏」二四件（三六・九％）の合計で三七件（五六・九％）と、朝日が八割強で毎日がそれに続く六割弱だが、読売は「エバディ氏」一件（二・六％）のみと極端に少なかった。読売は、それまでも、スーチー、メンチュ、ウィリアムズいずれに対しても「氏」をつけてこなかったという経緯がある。

次に「さん」づけについてみると、朝日は全三九件中「エバディさん」五件（一二・八％）、毎日は六五件中「エバディさん」一九件（二九・二％）と「シリン・エバディさん」九件（一三・八％）の合計二八件（四三・一％）であった。朝日は「氏」が多い分「さん」が少なく、毎日は「さん」と「氏」で二分されたかっこうである。それに対して読売は全六三件中「エバディさん」四六件（七三・〇％）と「シリン・エバディさん」一五件（二三・八）の合計で六一件（九六・八％）と、ほとんどを「氏」よりも「親しみやすい」とされる「さん」が



表10 マータイの呼び方 (延べ語数) (単位: 件)

2004年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
ワンガリ・マータイ氏 マータイ氏	4 14			4 14	18	26.5%
ワンガリ・マータイさん マータイさん ワンガリさん	6 3	5 13	8 13	19 29	48	70.6%
ワンガリ・マータイ マータイ ワンガリ					0	
ワンガリ・マータイ+肩書き マータイ+肩書き		2		2	2	2.9%
ワンガリ・マータイ女史 マータイ女史					0	
合 計	27	20	21	68	68	100.0%

占める状態が未だに続いている。

表10に示した二〇〇四年のノーベル平和賞受賞者のワンガリ・マータイは、〇五年の京都議定書発効記念行事に関連して来日し、そこで「モツタイナイ」ということばに出会い、世界に広めたことで知られている。ケニアの国会議員で、環境・天然資源・野生動物省の副大臣を務めた。また、環境保護の活動家であり、ナイロビ大学で初めて教授となった女性でもあった。毎日新聞はその後、紙面で「もったいないキャンペーン」を展開し、彼女の名が紙面に数多く踊ることとなったが、一年九月に死去している。

マータイの名は、調査期間中、三紙合計で六八件みられたが、議員や副大臣、元大学教授という肩書きの割には「さん」づけが多かった点に特徴がある。姓の「マータイさん」が最多の二九件(四二・七%)、姓と名の「ワンガリ・マータイさん」が一九件(二七・九%)と、合わせて四八件(七〇・六%)が「さん」づけであった。それに対して「マータイ氏」は一四件(二〇・六%)、「ワンガリ・マータイ氏」は四件(五・九%)で、「氏」の敬称は合計一八件(二六・五%)にとどまってい

る。「肩書き」記載は、「副環境大臣」二件というものであった。「氏」の敬称や肩書きによって大臣級であることを示すよりも、新聞は「親しみやすさ」を醸し出そうとしたのだろうか。

三紙別に比較すると、マータイに「氏」をつけていたのは朝日だけであり、全二七件中「マータイ氏」四件（四・八％）、「ワンガリ・マータイ氏」一四件（五一・九％）の合計一八件（六六・七％）を占めていたのに対して、毎日と読売では「氏」の敬称はゼロであった。その分、毎日と読売は「さん」づけがほとんどで、毎日は一〇件中一八件（九〇・〇％）、読売は二件中全てを占めた。また、二件みられた「肩書き」つき表記は、いずれも毎日であった。このように、朝日は「さん」も使うが、「氏」をより多く使っているという点で、他の二紙とはやや異なる傾向をみせている。それは、先述したように、朝日が〇二年二月に「『性差』敏感な議論を」という記事でジェンダー表現に関する問題提起をし、同年一〇月に「紙面をジェンダーの視点で」の記事で、死亡記事の敬称を女男ともに「さん」に統一することを表明した時期とも符合する。少なくともこの時期の朝日は、紙面で意識的に女性にも「氏」の敬称をつけようという機運にあったように見受けられる。

#### (4) 二〇一〇年代における女性の平和賞受賞者——サリーフ、ボウイー、カルマン

最後に、二〇一一年に同時受賞したアフリカの、エレン・サリーフ、リーマ・ボウイー、タワックル・カルマンの三名は、「紛争解決や民主化に女性が大きな力を発揮できることを示した功績を評価」（朝日、二〇一一年、一〇月八日）され、ノーベル賞を手にしたこととなった。

エレン・サリーフは、内戦が長らく続いていたりベリアにおいて、一九八〇年代には軍事政権に反発して米国の亡命、内戦終結後の二〇〇五年に大統領となり、国家再建に大きく貢献した。表11にみるように、調査期間中、

表11 サーリーフの呼び方(延べ語数) (単位: 件)

2011年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
エレン・サーリーフ氏 サーリーフ氏	4 35	2 18	17	6 70	76	46.3%
エレン・サーリーフさん サーリーフさん エレンさん	1 12	1 1		2 13	15	9.1%
エレン・サーリーフ サーリーフ エレン	2	1		1 2	3	1.8%
エレン・サーリーフ+肩書き サーリーフ+肩書き	5 16	6 13	15 15	26 44	70	42.7%
エレン・サーリーフ女史 サーリーフ女史					0	
合 計	75	42	47	164	164	100.0%

合計で一六四件登場し、これまでのスーチー、エバデイに次ぐ登場回数となった。

サーリーフへの敬称で最も多かったのは「氏」で、「サーリーフ氏」の七〇件(四二・七%)と「エレン・サーリーフ氏」の六件(三・七%)を合わせて合計七六件(四六・三%)と半数近くを占めた。また、「氏」に迫る頻度を示したのが「エレン・サーリーフ大統領」二六件(二五・九%)と「サーリーフ大統領」四四件(二六・八%)の「肩書き」つきで、合計七〇件(四二・七%)みられた。「氏」の敬称使用は、歴代受賞者中最多であり、また「肩書き」の使用も、現役の大統領ということもあつてか、今までの受賞者の中で最も多かった。

新聞別にみると、朝日で七五件、読売で四七件、毎日で四二件と、登場数にややムラがある。その中で朝日は「氏」の使用が半数を超え、「サーリーフ氏」三五件(四六・六%)と「エレン・サーリーフ氏」四件(五・三%)を合わせて「氏」が七九件(五一・九%)と、過半数を占めた。それに次いだのは「肩書き」つきで、「サーリーフ大統領」一六件(二一・三%)と「エレン・サーリーフ大統領」五件(六・七%)が合わせて

二一件(二八・〇%)あった。また「さん」づけは計一三件(一七・三%)と、実数、比率ともに三紙の中で最も多かった。

次に、毎日では、「サーリーフ氏」一八件(四二・九%)と「エレン・サーリーフ氏」二件(四・八%)とで、「氏」が合計二〇件、四七・六%に達する一方、「肩書き」つきも「サーリーフ大統領」の二件(三〇・九%)と「エレン・サーリーフ大統領」の六件(一四・三%)を合わせて一九件(四五・二%)にのぼり、「氏」と「肩書き」とで二分される形となった。

これに対し、読売では、「氏」をつけた表現が「サーリーフ氏」一七件(三六・一%)だったのに対し、「エレン・サーリーフ大統領」「サーリーフ大統領」がともに一五件(各三一・九%)、合計三〇件(六三・八%)を占め、「肩書き」をつける傾向が、三紙中で最も強かった。

しかしながら、次節以降でノーベル平和賞受賞者の男性を考察する際にもふれるが、「オバマ大統領」「金大中大統領」のように、男性の現役大統領が受賞する際には、圧倒的に肩書きで記述されている。それに比べると、サーリーフの場合は、同じ現職大統領であっても、「氏」で表記される割合が高い。

同時受賞したリーマ・ボウイー(読売では「レイマ・ボウイ」と表記)は、リベリアで平和運動に従事して内戦終結をもたらし、女性の参政権を訴えて西アフリカ地域の女性の地位向上に努めた市民運動家である。表12にみるように、全体では六〇件みられたが、サーリーフの出現頻度の半分以下にとどまっている。同じリベリア人ということもあつてか、サーリーフに代表されてしまった観があるが、政治家と市民とが両輪となって民主化を勝ち取ったことに対しての同等の受賞であるにもかかわらず、片や大統領、片や市民運動家であることが「格」の違いとみなされ、言及数の違いとなつてあらわれているのかもしれない。

表12 ボウイーの呼び方(延べ語数) (単位: 件)

2011年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計
リーマ・ボウイー氏 ボウイー氏	1	3 2	1	4 3	7 11.7%
リーマ・ボウイーさん ボウイーさん リーマさん	10 15	5 1	9 12	24 28 0	52 86.7%
リーマ・ボウイー ボウイー リーマ		1		1	1 1.7%
リーマ・ボウイー+肩書き ボウイー+肩書き					0
リーマ・ボウイー女史 ボウイー女史					0
合 計	26	12	22	60	60 100.0%

また、複数者が同時受賞した場合、必ずしも名前が公平に紙面に顕現するというわけではない。日本での知名度や、右に記したような「格」、また発表時の「名前順」などによって、微妙に変わってくるようである。今回の場合は、見出しなどで「サーリーフ大統領らに平和賞」のように、三人の受賞者をサーリーフに代表させるケースが少なくなかったことも、ボウイーの扱いの少なさの原因になっていそうである。

次に敬称別にみると、「ボウイーさん」二八件(四六・七%)、「リーマ・ボウイーさん」二四件(四〇・〇%)と、「さん」づけが合計五二件(八六・七%)にのぼった。一方、「氏」をつけた呼び方は、「ボウイー氏」と「リーマ・ボウイー氏」を合わせて計七件(一一・七%)にとどまっている。サーリーフに関しては「氏」の扱いが半数近くを占めたのとは対照的である。また、ボウイーには、ガーナに本部を置くNGO「女性の平和と安全ネットワーク(WIPSEN)アフリカ」の理事長という肩書きがあるが、そのような肩書きをつけた記事は皆無であった。

各紙別にみても、朝日では全二六件中「ボウイーさん」

表13 カルマンの呼び方 (延べ語数)

(単位: 件)

2011年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合計	
タワックル・カルマン氏 カルマン氏	1 2	8 11	1	10 13	23	27.1%
タワックル・カルマンさん カルマンさん タワックルさん	8 17	5 4	15 12	28 33	61	71.8%
タワックル・カルマン カルマン タワックル		1		1	1	1.2%
タワックル・カルマン+肩書き カルマン+肩書き					0	
タワックル・カルマン女史 カルマン女史					0	
合計	28	29	28	85	85	100.0%

一五件(五七・七%)、「リーマ・ポウイーさん」一〇件(三八・五%)、合計二五件(九六・二%)が、また読売は「ポウイさん」一二件(五四・五%)、「レイマ・ポウイさん」九件(四〇・九%)の合計二二件(九五・五%)が「さん」づけで、両紙ともほとんどが「さん」という敬称で占められている。それに対して毎日、登場件数こそ三紙の中で最も少ない一二件であるものの、「リーマ・ポウイー氏」と「ポウイー氏」合わせて五件(四一・七%)が「氏」の敬称つきである。毎日の場合、他紙で最多の「ポウイーさん」は一件(八・三%)しかみられなかった。

二〇一一年のもう一人の同時受賞者タワックル・カルマンは、長期独裁政権が続くイエメンのジャーナリストであり、作家であるが、ジャーナリスト女性を組織化し、ラジオやネットを通じて言論の自由や民主的権利を訴えたり、デモ活動を行ったりしている若い人権活動家として評価された。表13に掲げたように、調査期間中に八五件登場し、ポウイーよりも扱い数が多かった。

カルマンの場合も、「カルマンさん」三三件(三八・八%)、

「タワツクル・カルマンさん」二八件(三二・九%)と、合計六一件(七一・八%)が「さん」づけであった。しかしながら、「氏」の扱いはポウイーよりも多く、「カルマン氏」一三件(一五・三%)と「タワツクル・カルマン氏」一〇件(一一・八%)の合計で二三件(二七・一%)みられた。彼女は、イエメンの最大野党に所属し、また二〇〇五年に NGO「束縛のない女性のジャーナリスト(WJWC)」を立ち上げ、その代表を務めていたのだが、やはり「肩書き」表記は皆無である。

各紙別にみると、出現件数は、朝日二八件、毎日二九件、読売二八件と、三紙ほぼ同数となっている。しかし敬称別の比率で見ると、ポウイーの場合と同じく、ここでも毎日が独自の傾向を示し、「カルマン氏」一一件(三七・九%)と「タワツクル・カルマン氏」が八件(二七・六%)の合計一九件、六五・五%と、他の二紙にない高い「氏」の使用比率となった。

それに対して、朝日と読売では「さん」づけの件数と比率が高く、朝日は「カルマンさん」一七件(六〇・七%)と「タワツクル・カルマンさん」八件(二八・六%)の合計二五件(八九・三%)、読売は「カルマンさん」一二件(四二・九%)と「タワツクル・カルマンさん」一五件(五三・六%)の合計二七件(九六・五%)と、両紙とも「さん」の敬称がほとんどを占めている。たとえば、三名の受賞を報じる読売一〇月八日の一面「アフリカ・中東3女性に」の記事では、サーリーフに対しては一貫して「大統領」か「氏」の扱いであったが、ポウイー、カルマン、そして過去の受賞者として挙げられていたマータイについてはすべて「さん」となっており、格の差がみられる。また、見出しの「3女性」は、もし男性だったら「3氏」と書かれていたかもしれない。

二〇一一年の三名の女性の受賞は、この年を中心とする「アラブの春」といわれる中東の民主化に、女性の地位向上が不可欠であるというノーベル賞委員会側のメッセージを体現したものといえよう。ただ、平和運動に女性の

パワーが必要であるということはまったくその通りなのであるが、女性は平和的存在であり、女性だから平和運動に向いているという短絡的な考え方があったら、それもまた、ジェンダー・ステレオタイプをまぬがれてはいないであろう。男性の平和運動は、後述するように、「男性だから」ということで評価されているわけではない。メディアでの表現のみならず、こういった評価機関による「女性の能力」の過度な強調は、ダブルスタンダードをかえって永続させてしまうおそれを胚胎していることを、再確認しておく必要があるのではないだろうか。

(5) 一九九〇年代前半における男性の平和賞受賞者——デクラーク、マンデラ、アラファト、ペレス、ラビン

この節からは、ノーベル平和賞を受賞した「スーチー後」の男性たち一九人の敬称についてみていこう。データを取り出した期間は、女性たちと同じく、一九九一年以降の受賞年の一〇月から一二月いっぱいまでである。

一九九三年、南アフリカのアパルトヘイトを終結させた当時の南ア大統領のウィレム・デクラークと、アパルトヘイトに反対して長い間投獄されていた、南アフリカ民族会議（ANC）議長で、のちに南ア大統領となるネルソン・マンデラの二人が、ノーベル平和賞を受賞した。表14は、その敬称内訳である。マンデラの方が日本で知名度が高かったためか、三紙合計で一〇一件みられたのに対し、デクラークは二四件にとどまっている。そのうちデクラークは、「デクラーク」に「大統領」の「肩書き」がつくものが一四件（五八・三％）、次いで「ウィレム・デクラーク氏」「デクラーク氏」と、「氏」のつくものが合計七件（二九・一％）となった。また「さん」づけが二件と、わずかながらみられた。

一方、マンデラに対しては、「ネルソン・マンデラ」または「マンデラ」に「アフリカ民族会議（ANC）議長」などの「肩書き」がつくスタイルが、合わせて五一件（五〇・五％）みられ、「ネルソン・マンデラ」と「マンデ



表14 デクラーク、マンデラの呼び方(延べ語数) (単位:件)

1993年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
ウィレム・デクラーク氏 デクラーク氏	2	2	1 2	1 6	7	29.2%
ウィレム・デクラークさん デクラークさん ウィレムさん		2		2	2	8.3%
ウィレム・デクラーク デクラーク			1	1	1	4.2%
ウィレム・デクラーク+肩書き デクラーク+肩書き	4	4	6	14	14	58.3%
合 計	6	8	10	24	24	100.0%

1993年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
ネルソン・マンデラ氏 マンデラ氏	1 8	1 14	1 16	3 38	41	40.6%
ネルソン・マンデラさん マンデラさん ネルソンさん					0	
ネルソン・マンデラ マンデラ	1	2	1 5	1 8	9	8.9%
ネルソン・マンデラ+肩書き マンデラ+肩書き	3 9	1 18	7 13	11 40	51	50.5%
合 計	22	36	43	101	101	100.0%

ラ」に「氏」のついた形の合わせて四一件(四〇・六%)に、ほぼ二分された。「さん」づけは一件もなく、むしろ「ネルソン・マンデラ」「マンデラ」だけという「敬称なし」が九件(八・九%)みられるところに特徴がある。

各紙ごとにみた場合、読売が四三件と最多の登場件数で、次いで毎日が三六件、朝日が少なく二二件と、登場頻度にややばらつきが生じたが、三紙とも「肩書き」つきが一番多く、次が「氏」となっているという点では、それほど大きな違いはみられない。

表15は、中東に和平をもたらした貢献により一九九四年に受賞した、パレスチナ解放機構(PLO)議長

表15 アラファト、ペレス、ラビンの呼び方（延べ語数）（単位：件）

1994年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
ヤセル・アラファト氏 アラファト氏	4	1	5	10	10	7.8%
ヤセル・アラファトさん アラファトさん ヤセルさん					0	
ヤセル・アラファト アラファト	2	2	3	7	7	5.5%
ヤセル・アラファト+肩書き アラファト+肩書き	29	40	42	111	111	86.7%
合 計	35	43	50	128	128	100.0%

1994年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
シモン・ペレス氏 ペレス氏	3	2	1 5	1 10	11	42.3%
シモン・ペレスさん ペレスさん シモンさん					0	
シモン・ペレス ペレス			3 3	3 3	6	23.1%
シモン・ペレス+肩書き ペレス+肩書き	2	1 1	5	1 8	9	34.6%
合 計	5	4	17	26	26	100.0%

1994年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
イツハク・ラビン氏 ラビン氏	1	3		4	4	3.4%
イツハク・ラビンさん ラビンさん イツハクさん					0	
イツハク・ラビン ラビン	3		4	7	7	5.9%
イツハク・ラビン+肩書き ラビン+肩書き	31	42	35	108	108	90.8%
合 計	35	45	39	119	119	100.0%

のヤセル・アラファト、イスラエル外相のシモン・ペレス、イスラエル首相のイツハク・ラビンの三名の敬称である。アラファトとラビンは、新聞のみならずテレビや雑誌などメディア上でしばしば取り上げられ、日本でも知名度が高いことが影響してか、アラファトが三紙合計で一二八件、次いでラビンが一一九件に達した。一方、ペレスは二六件であった。

そのうち、アラファトは一一一件（八六・七）%が「パレスチナ解放機構（PLO）議長」、ラビンは一〇八件（九〇・八）%が「イスラエル」首相」と、両者とも「肩書き」つきが多数を占めた。一方、ペレスは、「氏」が合わせて一一件（四二・三%）、「イスラエル」外相」の「肩書き」が合わせて九件（三四・六%）と二分された。また、アラファトとラビンに関しては、姓名で紹介するフルネームの表記をおこなう新聞は皆無であった。

各紙ごとの違いをみると、登場数の違いは若干あるものの、アラファトとラビンは新聞別の違いがほとんどみられず、両者とも圧倒的に「肩書き」で呼称されている点で共通している。「アラファト議長」は、朝日で全三五件中二九件（八二・九%）、毎日で四三件中四〇件（九三・〇%）、読売で五〇件中四二件（八四・〇%）にのぼる。また、「ラビン首相」は、朝日が三五件中三二件（八八・六%）、毎日が四五件中四二件（九三・三%）、読売が三九件中三五件（八九・七%）という高頻度・高比率となっている。片や独立を求めて闘うアラブの最高指導者、片やイスラエルという国を率いる首相という面が強調された形だ。その分、三名同時受賞のもう一人の当事者である外相のペレスが、両者の間でかすんでしまった印象ではある。ペレスは、読売で、敬称なしの扱いが、六件（三五・三%）とやや多い。

ノーベル平和賞受賞者の男性たちは、これ以降も同様に、「肩書き」つきか「氏」の敬称のどちらかで呼ばれることがほとんどで、同じノーベル平和賞受賞者でも、「さん」が多く使われるものの、敬称のつけ方にばらつきも

みられる女性とは、大きく異なる傾向をみせている。

(5) 一九九〇年代後半における男性の平和賞受賞者——ロートブラット、ペロ、ホルタ、ヒューム、トリンプル

表16には、一九九五年に、核軍縮のパグウォッシュ会議会長として貢献して受賞したジョセフ・ロートブラット、九六年に、東ティモールの紛争の平和解決に尽力した功績により受賞した、司教のカルロス・（フィリペ・シメネス・）ペロと、東ティモール民族抵抗評議会代表のラモス・ホルタ（のちに東ティモール大統領）の敬称別出現頻度を掲げた。

まず、各受賞者の出現頻度をみると、パグウォッシュ会議のロートブラットは三紙合計で九四件、東ティモールのペロは、知名度の高さを反映してか、合計一八三件、ホルタは合計六三件であった。

ロートブラットについて、敬称の内訳を全紙通しでみると、「肩書き」の合計四七件（五〇・〇％）と「氏」の合計四二件（四四・六％）に二分された。

ただし、新聞ごとにやや異なっており、朝日で姓名に「氏」をつけた「ジョセフ・ロートブラット氏」が全二四件中一〇件（四一・七％）、毎日で姓に「氏」がついた「ロートブラット氏」が全二七件中一一件（四〇・七％）と目立っている。一方、全四三件登場した読売は、「ロートブラット（パグウォッシュ会議）会長」「ジョセフ・ロートブラット会長」といったように、合わせて二六件（六〇・五％）の「肩書き」つきが目についた。また、毎日も、「ロートブラット（パグウォッシュ会議）会長」などの「肩書き」つきが一六件（五九・三％）みられ、「氏」の一件を上回る数となっている。その一方で、朝日では、「肩書き」つきは五件（二〇・八％）にとどまっている。新聞により「肩書き」つきと「氏」の順位は入れかわるものの、総じて「肩書き」か「氏」のどちらかを使用

表16 ロートブラット、ペロ、ホルタの呼び方(延べ語数) (単位:件)

1995年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
ジョセフ・ロートブラット氏	10		8	18	42	44.7%
ロートブラット氏	6	11	7	24		
ジョセフ・ロートブラットさん					3	3.2%
ロートブラットさん	3			3		
ジョセフさん						
ジョセフ・ロートブラット			2	2	2	2.1%
ロートブラット						
ジョセフ・ロートブラット+肩書き	3		10	13	47	50.0%
ロートブラット+肩書き	2	16	16	34		
合 計	24	27	43	94	94	100.0%

1996年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
カルロス・(フィリペ・シメネス) ペロ氏	3	1		4	5	2.7%
ペロ氏	1			1		
カルロス・ペロさん					0	
ペロさん						
カルロスさん						
カルロス・ペロ					4	2.2%
ペロ	4			4		
カルロス・(フィリペ・シメネス) ペロ+肩書き	9	13	24	46	174	95.1%
ペロ+肩書き	43	47	38	128		
合 計	60	61	62	183	183	100.0%

1996年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
ラモス・ホルタ氏	13	3	9	25	58	92.1%
ホルタ氏	13	9	11	33		
ラモス・ホルタさん					0	
ホルタさん						
ラモスさん						
ラモス・ホルタ					0	
ホルタ						
ラモス・ホルタ+肩書き	1	2		3	5	7.9%
ホルタ+肩書き		2		2		
合 計	27	16	20	63	63	100.0%

するという点においては、各紙とも共通した傾向にあるということができよう。

次に、ペロとホルタの同時受賞者について全紙ベースでみてみると、ペロに関しては、「肩書き」として「司教」がつく「カルロス・ペロ司教」四六件（二五・一％）と「ペロ司教」一二八件（六九・九％）が合計で一七四件（九五・一％）と、圧倒的多数を占めた。それに対してホルタには「氏」のつく傾向が強く、「ラモス・ホルタ氏」二五件（三九・七％）、「ホルタ氏」三三件（五二・四％）、合計で五八件（九二・一％）にのぼった。ペロは「氏」の敬称がつかずに「司教」の肩書きで、ホルタは肩書きがつかずに「氏」の敬称で、それぞれ呼ばれている。ホルタに対して三紙合計五件（七・九％）付せられた「肩書き」は、「（共同）議長」や「民族抵抗評議会代表」といったものだった。両名ともに「さん」づけはまったくみられない。

なお、「カルロス・ペロ」というフルネームの記載は、三紙合計で五〇件の頻度であったが、後述する「金大中」の三一〇件に次ぐ数である。

ここで三紙を比較してみると、ペロに関しては、読売で「氏」が皆無、朝日で「敬称なし」の「ペロ」が四件みられたものの、いずれも少数であり、三紙とも「肩書き」つきがほとんどであるという点で違いはみられなかった。ホルタについては、毎日で「肩書き」つきが四件みられるが、各紙とも「氏」が大多数を占めており、大きな差はない。

表17は、一九九八年に北アイルランドの和平に貢献した功績により平和賞を授与された社会民主労働党（SDLP）党首ジョン・ヒュームと、北アイルランド自治政府首相デビッド・トリンブルに対する敬称一覧である。

独立をめぐり、長年にわたって紛争が続いてきたアイルランドの問題は、きわめて深刻なものであるが、日本にはあまり馴染みがないということを反映してか、ヒュームは三紙合計で四一件、トリンブルは二二件と、やや地味

表17 ヒューム、トリンプルの呼び方(延べ語数) (単位:件)

1998年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
ジョン・ヒューム氏 ヒューム氏	6 3	6 4	1 7	13 14	27	65.9%
ジョン・ヒュームさん ヒュームさん ジョンさん					0	
ジョン・ヒューム ヒューム		1	2 1	3 1	4	9.8%
ジョン・ヒューム+肩書き ヒューム+肩書き	1	2 2	1 4	4 6	10	24.4%
合 計	10	15	16	41	41	100.0%

1998年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
デビッド・トリンプル氏 トリンプル氏	3	8	4	15	15	68.2%
デビッド・トリンプルさん トリンプルさん デビッドさん					0	
デビッド・トリンプル トリンプル			1	1	1	4.5%
デビッド・トリンプル+肩書き トリンプル+肩書き		3	3	6	6	27.3%
合 計	3	11	8	22	22	100.0%

な扱いであった。ヒュームはフルネームないし姓の次に「氏」をつける表記がほぼ半々で、合わせて二七件(六五・九%)と最多であり、フルネームないし姓に「肩書き」がついたものが、合計一〇件(二四・四%)となっている。肩書きは「(社会民主労働党) 党首」である。この傾向はトリンプルもほとんど同じで、姓に「氏」の敬称が合計一五件(六八・二%)、姓に「肩書き」つきの表記が六件(二七・三%)である。肩書きは「(北アイルランド自治政府) 首相」ないし「党首(彼はアルスター統一党党首でもある)」であった。両者ともに「さん」の呼称が全く使われていないことは、ここでも共通している。

各紙別にみると、三紙とも「トリンプル氏」が多数であるが、もともと全三件と少ない朝日がすべて「トリンプル氏」の記載となっており、毎日は一一件中八件（七二・七％）、読売は八件中四件（五〇・〇％）が「氏」となっていた。また、毎日・読売とも「肩書き」つきが三件みられた。

#### ⑥ 二〇〇〇年代前半における男性の平和賞受賞者——金大中、アナン、カーター

表18には、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の金正日首相と南北会談を行い、朝鮮半島の緊張緩和に寄与したとして二〇〇〇年に受賞した大韓民国大統領の金大中と、〇一年、長年にわたる平和活動が評価され、国際連合とともに平和賞を受賞した国連事務総長コフィー・アナン、そして〇二年、国際紛争解決に努力した功績で受賞した元米国大統領ジミー・カーターの敬称内訳を掲げた。

七〇年代より日本でも韓国の大統領候補として知られ、KCIAによって日本から拉致されて本国で死刑判決まで受けた金大中の受賞は、南北が対立している隣国の平和問題でもあり、日本の安全保障ともかかわる。そのため、見出しでの金大中への言及は、三紙合計で五〇四件の多さに達した。そのうち、フルネームの「金大中（韓国）大統領」二五〇件（四九・六％）、姓のみの「金（韓国）大統領」一五五件（三〇・八％）の、合わせて四〇五件（八〇・四％）が「大統領」の肩書きとなった。一方、「氏」のつくものは、「金大中氏」五九件（一一・七％）、「金氏」三九件（七・七％）で、合計九八件（一九・四％）みられた。

各紙ごとの違いはあまりみられず、いずれも「金大中大統領」が最多で、朝日では全一四八件中七三件（四九・三％）、毎日では全一八八件中八八件（四六・八％）、読売では一六八件中八九件（五三・〇％）を占め、次いで「金大統領」が続ぎ、朝日四〇件（二七・〇％）、毎日六七件（三五・六％）、読売四八件（二八・六％）と、どれ



表18 金大中、アナン、カーターの呼び方(延べ語数) (単位:件)

2000年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
金大中氏 金氏	16 19	18 14	25 6	59 39	98	19.4%
金大中さん 金さん 大中さん					0	
金大中 金		1		1	1	0.2%
金大中+肩書き 金+肩書き	73 40	88 67	89 48	250 155	405	80.4%
合 計	148	188	168	504	504	100.0%

2001年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
コフィー・アナン氏 アナン氏					0	
コフィー・アナンさん アナンさん コフィーさん			5	5	5	4.7%
コフィー・アナン アナン					0	
コフィー・アナン+肩書き アナン+肩書き	25	36	40	101	101	95.3%
合 計	25	36	45	106	106	100.0%

2002年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
ジミー・カーター氏 カーター氏	13	6 36	3 12	9 61	70	44.3%
ジミー・カーターさん カーターさん ジミーさん	3	4	2 1	2 8	10	6.3%
ジミー・カーター カーター					0	
ジミー・カーター+肩書き カーター+肩書き	4 16	4 29	6 19	14 64	78	49.4%
合 計	36	79	43	158	158	100.0%

も「肩書き」つきの呼び方が定型表現となっている。ただ「氏」に関しては、朝日で姓のみの「金氏」がやや多く、「金大中氏」と姓名で記載することの多い他二紙とは少し違っている。

金大中同様メディア上で見聞きすることの多かった、ガーナ人の国連事務総長アナンは、受賞した二〇〇一年の調査期間中に一〇六件登場している。そのほとんどを占める一〇一件（九五・三％）は、「アナン（国連）事務総長」という聞き慣れ、かつ読み慣れた肩書きつきのものであった。一方、「氏」の敬称は一件もなく、「さん」づけが五件（四・七％）みられたのみである。また、すべての形を通して、なぜかコフィー・アナンとフルネームが記されたものは皆無であった。

新聞別には、読売、毎日、朝日の順で登場頻度が減るが、「アナンさん」が読売で五件（読売の一・一％）みられたほかは、すべて姓のみの「アナン」に「肩書き」つきのものであった。

一九七七年から八一年まで米大統領の職にあり、〇二年にノーベル平和賞を受賞したカーターは、合計で一五八件みられた。うち最多は、姓のみの「カーター」に「元（米国）大統領」がつくもので、六四件（四〇・五％）、それに姓名に肩書きのつく「ジミー・カーター元（米国）大統領」一四件（八・九％）を合わせると、「肩書き」つきが全体の半数の七八件（四九・四％）を占めている。一方で、姓の「カーター」に「氏」がつけられる表記が六一件（三八・六％）、姓名の「ジミー・カーター」に「氏」がつけられる表記が九件（五・七％）と、合計七〇件（四四・三％）が「氏」の敬称つきで扱われていた。また、「さん」という敬称が、「ジミー・カーターさん」「カーターさん」合わせて一〇件（六・三％）と、わずかながらみられた。

新聞別には、登場件数にややむらがあり、毎日が七九件で最も多く、次いで読売が四三件、朝日が毎日の半分以下の三六件となっている。朝日は「氏」が一三件（三六・一％）に対し、「肩書き」つきが二〇件（五五・六％）、

毎日は「氏」が四〇件（五〇・六％）に対し「肩書き」つきが三三件（四一・八％）、読売は「氏」が一五件（三・八％）に対し「肩書き」つきは二五件（五八・一％）となった。相対的に、毎日で「氏」の使用が多く、朝日と読売では「肩書き」つきが「氏」を上回っている。

(7) 二〇〇〇年代後半における男性の平和賞受賞者

——エルバラダイ、ユヌス、ゴア、アハティサリ、オバマ、劉曉波

表 19 は、二〇〇五年受賞者の、国際原子力機関（IAEA）事務局長として原子力エネルギーの平和利用に貢献したとされるエジプト人のモハメド・エルバラダイ、貧困層を対象にした低金利・無担保融資のマイクロクレジットの制度を普及させて〇六年に受賞したグラミン銀行総裁のバングラディッシュ人、ムハマド・ユヌス、〇七年に受賞の、地球温暖化問題を著書などで世界中に知らせ、その防止に必要な措置の基盤を築いたことで評価された元米副大統領アル・ゴアの、それぞれの敬称である。エルバラダイは一一一件、ユヌスは九九件、ゴアは二一〇件みられた。

IAEA とともに受賞したエルバラダイは、三紙合計で、姓に「IAEA 事務局長」の「肩書き」つきの六五件（五八・六％）と姓に「氏」の四六件（四一・四％）に二分されたのみで、ほかの呼び方はまったくみられなかった。

各紙とも傾向にそれほど大きな差はなく、「エルバラダイ事務局長」が朝日全三九件中二一件（五三・八％）、毎日全四〇件中二七件（六七・五％）、読売全三三件中一七件（五三・一％）と「肩書き」つきが半数を超え、「氏」つきの「エルバラダイ氏」は朝日で一八件（四六・二％）、毎日で一三件（三二・五％）、読売で一五件（四六・九

表19 エルバラダイ、ユヌス、ゴアの呼び方 (延べ語数) (単位: 件)

2005年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
モハメド・エルバラダイ氏 エルバラダイ氏	18	13	15	46	46	41.4%
モハメド・エルバラダイさん エルバラダイさん モハメドさん					0	
モハメド・エルバラダイ エルバラダイ					0	
モハメド・エルバラダイ+肩書き エルバラダイ+肩書き	21	27	17	65	65	58.6%
合 計	39	40	32	111	111	100.0%
2006年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
ムハマド・ユヌス氏 ユヌス氏	2 14	8 13	10 30	20 57	77	77.8%
ムハマド・ユヌスさん ユヌスさん ムハマドさん	1 2		1	2 2	4	4.0%
ムハマド・ユヌス ユヌス					0	
ムハマド・ユヌス+肩書き ユヌス+肩書き	2	8 5	1 2	11 7	18	18.2%
合 計	21	34	44	99	99	100.0%
2007年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
アル・ゴア氏 ゴア氏	9 24	3 62	6 29	18 115	133	63.3%
アル・ゴアさん ゴアさん アルさん	1 1			1 1	2	1.0%
アル・ゴア ゴア	2 1	1		3 1	4	1.9%
アル・ゴア+肩書き ゴア+肩書き	4 8	22 12	11 14	37 34	71	33.8%
合 計	50	100	60	210	210	100.0%

%) となった。またアナンと同様、「モハメド・エルバラダイ」というフルネームの記載はみられなかった。

グラミン銀行とともに貧困層の経済的・社会的基盤を築いたことで顕彰されたユヌスは、「肩書き」よりも「氏」が多く、「ムハマド・ユヌス」に「氏」をつけた表現が二〇件(二〇・二%)、「ユヌス」に「氏」をつけたものが五七件(五七・六%)で、「氏」の敬称表記が合計七七件(七七・八%)と大多数を占めた。「肩書き」は、合計一八件(一八・二%)みられ、そのほとんどは「総裁」であった。また「さん」づけも計四件(四・〇%)と若干みられた。受賞当時、グラミン銀行総裁という役職・肩書きがあつたにもかかわらず、この人は「氏」つきで呼ばれることが多いのが特徴である。

三紙別にみると、二一件登場した朝日で、他紙にほとんどみられない「さん」が二件(九・五%)みられるほか、毎日で「肩書き」つきが三四件中一三件(三八・二%)、読売で「氏」が四四件中四〇件(九〇・九%)みられるなど、違いが生じている。

ビル・クリントン米大統領時代の副大統領の時に「情報スパーハイウェイ構想」によってインターネットを普及させ、大統領選落選後は地球温暖化に関するドキュメンタリー映画『不都合な真実』への出演などで日本でもよく知られるゴアは、「ゴア氏」の二五件(五四・八%)を筆頭に、「アル・ゴア氏」一八件(八・六%)とで合計一三三件(六三・三%)に「氏」の敬称がつけられていた。「元」ということで先のカーターと似ているが、カーターの場合は「氏」と「肩書き」がほぼ半々で敬称を二分していたのに対し、ゴアの場合は「元副大統領」「前副大統領」などの肩書きは、フルネーム「アル・ゴア」プラス肩書きの表記が三七件(二七・六%)、姓のみの「ゴア」プラス肩書きの表記が三四件(一六・二%)の計七一件(三三・八%)にとどまっている。エコロジィ・ブームによる関心の高まりもあって、メディア的な話題性はカーターよりもあつたようだが、カーターが「大統領」で

あったのに対して、ゴアの場合は「副大統領」であったという、「肩書きの力」の差であろうか。

新聞別には、登場数に濃淡がみられ、毎日が最多の一〇〇件、読売が六〇件、朝日が五〇件となった。内訳をみると、朝日で「氏」が三三件(六六・〇%)に対し「肩書き」が二二件(二四・〇%)、毎日で「氏」が六五件(六五・〇%)に対して「肩書き」が三四件(三三・〇%)、読売で「氏」が三五件(五八・三%)に対して「肩書き」が二五件(四一・七%)となっており、相对比较でみれば、極端に大きな差はみられない。

男性のノーベル賞受賞者たちの最後の表となる表20には、三人の敬称を掲げた。一人は、二〇〇八年、アチエ和平合意交渉やコソボ独立の仲介案など調停役を務めた功績で授与された、元フィンランド大統領マルティ・アハティサリ。もう一人は、〇九年に「核兵器なき世界」に向けて国際社会へ働きかけた功績で受賞した、米大統領バラク・オバマ。そして、一〇年受賞の、中華人民共和国の民主化運動に加わって幾度か逮捕・投獄され、懲役刑で服役中の著作家・運動家、劉曉波である。アハティサリは六九件がカウントされ、〇九年の大統領就任時に日本でも一大ブームを巻き起こしたオバマは七四五件、そして劉曉波は、隣の大国中国の民主化問題への関心の高まりを反映して、本調査中最多の八九六件が数えられた。

アハティサリは、大統領退任後に平和調停に活躍した点で、カーターと同じケースであるが、敬称に関して、むしろゴアに似て、「氏」が三紙合計四八件(六九・六%)と、主たる敬称となっている。「肩書き」は「元(前)フィンランド大統領」で、合計二〇件(二九・〇%)にとどまった。どちらもフルネームで扱われるより姓のみの記載が多い。「肩書き」よりも「氏」が多いのは、現役大統領時代に日本のメディアではあまり報道されず、カーターほどネームバリューがないためであろうか。

新聞別にみると、朝日は全二二件中「氏」が一五件(六八・二%)、「肩書き」が七件(三一・八%)、毎日は全

表20 アハティサーリ、オバマ、劉曉波の呼び方(延べ語数)(単位:件)

2008年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
マルティ・アハティサーリ氏 アハティサーリ氏	1 14	15	18	1 47	48	69.6%
マルティ・アハティサーリさん アハティサーリさん マルティさん					0	
マルティ・アハティサーリ アハティサーリ		1		1	1	1.4%
マルティ・アハティサーリ+肩書き アハティサーリ+肩書き	3 4	8	5	3 17	20	29.0%
合 計	22	24	23	69	69	100.0%

2009年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
バラク・オバマ氏 オバマ氏	2 87	2 53	2 49	6 189	195	26.2%
バラク・オバマさん オバマさん バラクさん	10	2	1 7	1 19	20	2.7%
バラク・オバマ オバマ	1 13	7	4	1 24	25	3.4%
バラク・オバマ+肩書き オバマ+肩書き(「オバマ一家」含む)	3 136	2 198	9 157	14 491	505	67.8%
合 計	252	264	229	745	745	100.0%

2010年受賞	朝日	毎日	読売	小計	合 計	
劉曉波氏 劉氏	134 145	104 137	167 146	405 428	833	93.0%
劉曉波さん 劉さん 曉波さん	4 15	2 1	10 6	16 22	38	4.2%
劉曉波 曉波(下の名のみ)	11	5 1	7	23 1	24	2.7%
劉曉波+肩書き 劉+肩書き(「劉夫妻」)			1	1	1	0.1%
合 計	309	250	337	896	896	100.0%

二四件中「氏」が一五件(六二・五%)、「肩書き」が八件(三三・三%)、読売は全二三件中「氏」が一八件(七八・三%)、「肩書き」が五件(二一・七%)と、おおむね似た傾向となっている。

一方、現役の米国大統領であるオバマは、「大統領」を「肩書き」とするケースが多く、三紙合計で、フルネームの「バラク・オバマ大統領」一四件(一・九%)と姓のみの「オバマ大統領」四九一件(六五・九%)とを合わせて、「大統領」の肩書きがつけられた名前は五〇五件(六七・八%)を占めた。また「氏」という敬称がそれに次ぎ、「バラク・オバマ氏」六件(〇・八%)と「オバマ氏」一八九件(二五・四%)が計一九五件(二六・二%)みられた。「肩書き」にせよ「氏」にせよ、フルネームの「バラク・オバマ」よりも、呼び習わされた姓のみの「オバマ」という表記が大多数となっている。また、「さん」づけが二〇件(二・七%)、「敬称なし」が二五件(三・四%)みられた点は、他の受賞者とはやや異なつた傾向といえる。それだけ日本の読者・メディアに「近い」ということなのかもしれない。

各紙別にみると、朝日で全二五二件中「肩書き」つきが一三九件(五五・二%)、「氏」の敬称が八九件(三五・三%)、毎日で全二六四件中「肩書き」が二〇〇件(七五・八%)、「氏」が五五件(二〇・八%)、読売で全二二九件中「肩書き」が一六六件(七二・五%)、「氏」が五一件(二二・三%)と、毎日と読売で「肩書き」つきの占める割合が朝日より高い傾向がみられた。その分朝日は、「オバマ」のような「敬称なし」や「オバマさん」のような「さん」づけが他紙よりやや多くなっている。

劉曉波の場合は、所属・役職などがなかったためもあつてか、三紙合計で姓の「劉」に「氏」のつくものが四二八(四七・八%)件、フルネームの「劉曉波」に「氏」のつくものが四〇五件(四五・二%)、合わせて八三三件(九三・〇%)と、ほとんどが「氏」の敬称つきであった。以下、「さん」づけが合わせて三八件(四・二%)、「敬称



なし」が二四件(二・七%)となった。

各紙別にみると、登場件数は読売が最多で三三七件、次に朝日が三〇九件、毎日が二五〇件となっており、「劉曉波氏」と「劉氏」とで若干各紙のウェイトが違い、朝日は「劉曉波氏」一三四件(四三・四%)に対して「劉氏」一四五件(四六・九%)と二分され、毎日は「劉曉波氏」一〇四件(四一・六%)に対して「劉氏」は一三七件(五四・八%)、読売は「劉曉波氏」一六七件(四九・五%)に対して「劉氏」が一四六件(四三・三%)となっている。また、朝日で「劉さん」、読売で「劉曉波さん」を中心とした「さん」づけが、そして朝日で「敬称なし」の「劉曉波」が、やや目立つ。

民主化を求めて国内で弾圧され拘束された社会運動家という点では、アウンサン・スーチーも劉曉波と同じといっているが、その扱われ方は、年代が違うとはいえ、片や劉には圧倒的に「氏」がつけられ、片やスーチーには当初「女史」でのちに「さん」、ごく最近になって「氏」がつけられ出したといったように、ずいぶん違ったものになっている。

また、男性の場合は、全員がというわけではないが、所属先や役職が「現役」であるかどうか、「肩書き」と「氏」を分ける指標になるケースが多いようである。しかしながら、いずれにせよ男性は、ほとんどが「肩書き」か「氏」という敬称で表現されていることに変わりはなく、また、女性のように、時代によって呼び方が、たとえば「女史」から「さん」、そして「氏」へと、変化してきたわけでもない。敬称のつけ方にどういった一貫性や規準があるのかよくわからない女性の場合とは、まったく異なっているのである。

## (8) 女性と男性のノーベル賞受賞者の間の顕著なダブルスタンダード

以上、「スーチャー後」の女性と男性のノーベル平和賞受賞者の敬称を個別にみてきた。ここでは、あらためて全体を通して振り返ることで、女男の呼び方にあらわれたダブルスタンダードの実態を確認しておきたい。

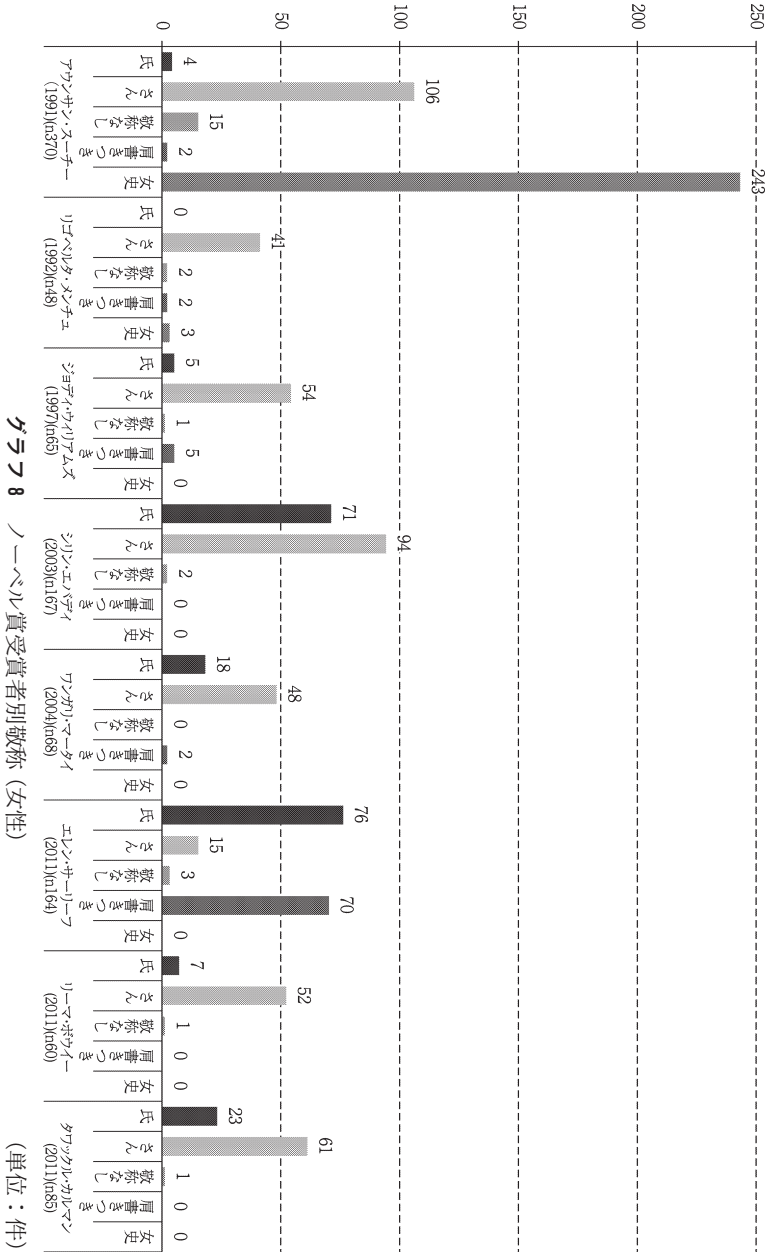
まず、女性のノーベル平和賞受賞者に対する表現のしかたの変遷が著しいことに注目したい。グラフ8は、女性の受賞者の敬称を、姓名の表記のしかたのいかんを問わずに「氏」「さん」「敬称なし」「肩書き」「女史」に五分類し、各受賞者ごとに三紙合計の値を示したものである。

このグラフから、調査期間中に各受賞者が取り上げられた件数をみると、一九九一年のアウンサン・スーチャーの三七〇件が著しく多く、二位のシリン・エバディー一六七件、エレン・サーリーフ一六四件を大きく引き離している。そして、四位以下の受賞者は、いずれも一〇〇件以下にとどまっている。

次に特筆すべきは、スーチャーの「女史」の値の高さで、二四三件と全体の七割近くに達していることである。しかしながら、スーチャー以後は、次のリゴベルタ・メンチュで三件みられたのを最後に、「女史」はまったく使用されなくなっていることがわかる。「女史」はもはや死語と化したということができよう。

「さん」づけは、アウンサン・スーチャーに関しては一〇六件と第二位であったが、その後の各受賞者では、エレン・サーリーフを除き、最も多い呼び方となり、リゴベルタ・メンチュで四一件、ジョディ・ウィリアムズで五四件、シリン・エバディーで九四件、ワングリ・マータイで四八件を記録した。唯一例外のエレン・サーリーフに関しては、大統領という肩書きが大部分を占め、「さん」は一五件にとどまったが、リーマ・ボウイーでは五二件、タワックル・カルマンでは六一件であった。

一方、「氏」については、アウンサン・スーチャー、リゴベルタ・メンチュ、ジョディ・ウィリアムズまでは、件



グラフ 8 ノーベル賞受賞者別敬称 (女性)

数が少なくいずれも五件以下であったが、それ以降は急増し、シリル・エバディ七一件、エレン・サーリーフ七六件などが目立つ。ただし、リーマ・ボウイーだけは一桁の使用となった。

肩書きをつけた呼び方についてみると、女性の受賞者の場合、現職大統領であるサーリーフの七〇件を除いて、あとは全員五件以下と圧倒的に少ない。彼女らに所属や役職がなく肩書きをつけることが不可能だったわけではなく、現に肩書きをつけた呼び方も若干みられたことに注目したい。しかしながら、たとえばシリル・エバディには、肩書きとして「元裁判官」や「弁護士」をつけることも可能だったはずだが、実際にはゼロ件であった。また、サーリーフの場合、このあとでみるように、オバマなど男性の大統領が「氏」よりも「大統領」の肩書きで扱われることが大多数であるのは異なり、「大統領」の肩書きよりも「氏」の敬称の方がやや上回っていた。

次に、男性のノーベル平和賞受賞者につけられた敬称を、姓名の表記のしかたのいかんを問わずに、「氏」「さん」「敬称なし」「肩書き」に四分類し、各受賞者ごとに三紙合計の値を示したのがグラフ9である。

これを見てまず第一に明らかなのは、男性の出現件数(三七一九件)が、女性の出現件数(二〇二七件)と比較してかなり多いことである。一人当たりに換算すると、一人の受賞男性の一人当たりの出現件数は一九六件であるのに対し、八人いる女性の一人当たりの出現件数は一二八件で、一・五倍の差がある。

第二にいえることは、少なからぬ男性の受賞者が、所属や役職などの「肩書き」で呼ばれていることである。全一人中過半数の一人で「肩書き」が「氏」を上回っており、中でもアラファト(二二一件)、ラビン(一〇八件)、カルロス・ペロ(二七四件)、金大中(四〇五件)の四人は、圧倒的に「肩書き」で呼ばれている。また、バラク・オバマの「肩書き」(五〇五件)も「氏」(一九五件)との乖離が大きく、モハメド・エルバラダイの「肩書き」(六五件)と「氏」(四六件)にも、やや開きがある。これらは、現役の議長、首相、司教、大統領、事務局長



といった人たちである。それに対して、女性の場合には、サーリーフに典型的にみられるように、同じ現職大統領であつても「氏」と書かれる割合が相対的に多い。

第三に、男性の場合、「氏」が「肩書き」に次いでいるということである。「氏」が「肩書き」を上回るのはラモス・ホルタ五八件、ジョン・ヒューム二七件、デビッド・トリンブル一五件、ムハマド・ユヌス七七件、アル・ゴア一三三件、マルティ・アハティサリ四八件、そして劉曉波八三三件の、計七人である。ゴアを除いて、日本ではあまり知られていない人びとと言つてもいいかもしれない。その場合は、現役であり所属や肩書きがあるにもかかわらず「氏」がつけられる傾向が強いようだ。また、ジミー・カーターのみ、「氏」(七八件)と「肩書き」(七〇件)が半ば拮抗していた。

第四に、男性では、「さん」や「敬称なし」がほとんどみられないということである。「さん」がつく上位三人の劉、オバマ、カーターにしても、それぞれ三八件、二〇件、一〇件にとどまっている。

最後に、右にみた女男それぞれの特徴をふまえ、受賞者たちにつけられた各敬称ごとの合計を、女男別に算出して比較しておこう。まず、女性は、「氏」が二〇四件(全敬称に対して一九・九%)、「さん」が四七一件(四五・九%)、「敬称なし」が二五件(二・四%)、「肩書き」が八一一件(七・九%)、「女史」が二四六件(二三・九%)となっている。それに対して男性は、「氏」が二七四〇件(四六・八%)、「さん」が八四四件(二・三%)、「敬称なし」が九六件(二・六%)、「肩書き」が一七九九件(四八・四%)であった。男性は、「氏」と「肩書き」で二分され、両者で九五%を占めているのに対し、女性は、「さん」が半分近くを占め、残りは「女史」と「氏」に二分される。以上からも、敬称使用におけるダブルスタンダードは、明らかだといえるだろう。

おわりに——ダブルスタンダード表現の解消に向けて

(1) 「肩書き」「氏」「さん」の意味するもの

社会言語学では、代名詞による敬称の研究をもとに、社会関係による言語表現の使い分けの要因として「力 (power)」と「仲間意識 (solidarity)」が、提唱されている。<sup>(10)</sup> 今回本調査研究でみてきたのは、代名詞ではなく、接尾語としての敬称（およびそれに替わるものとしての役職名）であるが、同じような観点から考察することができるであろう。

もともと「さん」が、「様」のくだけたいい方、親しみの気持ちを込めたいい方、軽い敬意をあらわす接尾辞であることは、本稿の初めの方で『広辞苑』を引いて紹介したとおりである。新聞の場合、人名が出てくるのは客観的・中立的な報道記事の中であって、「宛名」や口語場面での「呼び方」とは違うので、「様」という最上級の敬称はなじみにくく、それをを用いないことが失礼にあたるとはみなされない。

役職名（肩書き）は、社会的な権威をあらわすという意味で、「力 (power)」に関連するものとなり得る。一方、「さん」には、「力」というよりも「仲間意識 (solidarity)」の要因が強めとみることができ、「氏」はその中間に位置すると考えられる。

「さん」の、「仲間意識」や「親しみやすさ」の次元の例としては、たとえば「氏」の敬称がつけられていた政治家が、同日の別の記事では「さん」と表記されていることなどにみることができ、「さん」を用いることで、その政治家をより身近な存在として感じさせることができるといえよう。

敬称も肩書きもつかない「敬称なし」が用いられるケースは、二通りあると考えられる。一つは、犯罪者などを呼ぶ際に、接尾語を何もつけないことにより、社会的に負のイメージを与える「呼び捨て」である。長年メディアが犯罪者などに対し呼び捨てを通してきた背景には、「国民感情」があつたとされているが、それは、「人権を剝奪」するという機能を果たしてきたといえよう。新聞・テレビでは、一九八〇年代後半から逮捕時の被疑者や、裁判中・判決確定後の犯罪者などに対する呼び捨て報道をやめて、「〇〇容疑者」「〇〇被告」「もと〇〇受刑囚」などと、いわば「肩書き」をつけるようにし、「人権に配慮」するようになってきている。<sup>(11)</sup>

もう一つは、日本人や外国人の作家・芸術家、俳優、タレント、スポーツ選手、学者、映画監督、過去の政治家、その他著名人など、専門性の高い人びとを敬称をつけずに呼ぶケースである。これは、多くの人に知られている名前であり、また、その一芸や名声に秀でた「力」ゆえに、敬称をつけなくても「失礼」に当たらないということなのだと思われる。

「敬意度」のレベルを考えると、一般的に、この四つの敬称の関係は（著名人の「敬称なし」は例外として、以下のような「序列」となるだろう。

肩書き √ 氏 √ さん √ 〇（敬称なし）

関恵靖は、日本人は周囲のあらゆる事物に接尾辞「さん」をつけることによって（たとえば職業：「お医者さん」、動物：「象さん」、店・会社：「靴屋さん」、物：「お人形さん」、宗教：「仏さん」など）、対象への距離感をなくし、親密な関係を維持したいという意識が根底にあると述べつつ、同時に、対象に対する話し手の尊敬や親愛の



程度によって、「さま」「ちゃん」など接尾辞の形を変えていると指摘している。<sup>(12)</sup>

日常的な言語実践をおこなっている私たち同様、新聞もまた、「敬意度」や「身近さ」の違いをあらわす敬称を、言及対象によって、ほとんど無意識のうちに使い分けているのである。

本稿で言及したように、朝日新聞では二〇〇二年、記事表現に関する社内の「取り決め集」を改訂し、死亡記事の敬称を女男とも「さん」に統一し、ジェンダーについてのガイドラインを盛り込んだ。改訂作業にあたっては「ジェンダーに関する小委員会」をつくり、各部署で話し合ったというが、死亡記事の敬称を女男で統一すると性別がわからなくなる場合があるとか、「さん」では軽い感じがする、といった反論も出たという。「さん」だと軽いということは、これまで男性よりも「軽い」敬称を女性に意図的につけてきたことを、新聞人が自ら認めたようなものではないだろうか。

本調査研究で明らかになった、ノーベル平和賞受賞者の女性が「さん」で呼称される傾向が、各紙必ずしも弱まっていない事実からは、「親しみやすさ」「身近さ」を込めた扱いや、所属や肩書きがないという事情以上に、男性に比べて女性への「敬意度」を低めに扱っているのではないかという疑念を払拭できない。「力」と「仲間意識」は、対人的な言語表現の基本的な要因であり、どちらに優劣があるというわけではないが、男性への敬称は「力」重視、女性への敬称は「仲間意識」重視というように、新聞紙上で用いられる敬称がジェンダーと連動していると考えれば、それはジェンダーバイアスのひとつであり、ダブルスタンダードといわざるを得ない。

先の「敬意度」の序列に、今回のノーベル賞受賞者のジェンダーをあてはめれば、次のようになるだろうか。

肩書き √ 氏 √ さん

男性 ∨ 男性

女性 ∨ 女性

朝日は「取り決め集」の中で、「男女のいずれかを排除したり、いずれかに偏ったりしない」「性別により役割、職業を固定化しない」「男女間に優劣・上下の関係が存在するかのようない扱いをしない」「必要以上に性別による区分を行わない」といったルールに加えて、「積極的に男女平等を促す表現を作り出す」と打ち出している。しかしながら、その方針に従って、死亡記事については敬称が「さん」に統一されたものの、本調査研究が明らかにしたように、一般記事では、いまだに男性が登場する場合は「氏」で、女性が登場する場合には「さん」づけが多い、という実情をみると、どこまで社内的にこのルールが徹底されているのか、疑問が残るのである。人権・差別問題に関する研修や表現ガイドラインは、各社にあるとされているが、そこにジェンダーの視点がどの程度入っているのか、またガイドラインをテキストにした社内教育が各メディアでどのように行われているかについては、本研究会の今後の調査課題である。

## (2) 変化の背景にある女男平等施策の進展

とはいえ、本研究会のほぼ五年おきの調査でも明らかになつていくように、女性と男性の敬称の違いは、量的には明らかに変化しつつある。今行つたアウンサン・スーチーに対する敬称のデータベース調査および女性と男性のノーベル平和賞受賞者に対する敬称の調査からも、「女史」の使用は「初期スーチー」時代の九一年には多かったものの、九二年のメンチュで激減し、それ以降は皆無となつている。

その一方、二〇〇〇年代に入ってから、それまでは男性の「専売特許」であった観のある「氏」という敬称を女性にもつけるようになったのは、これまでにはなかったトレンドが始まっていることを示唆している。女性と男性とで敬称を使い分けるダブルスタンダード表現が、減ってきていることは間違いない。

こうした変化に影響していると思われるのが、一九八五年に成立した、男女雇用機会均等法である。一九八六年の均等法施行以降に入社した女性たちが企業の中堅世代となり、会社や官公庁など社会で肩書きのある地位につくようになっていく。政治家や取締役をはじめとする高い地位に就く女性は、先進国の中でもきわめて少数であり、また、遅々とした歩み方でしかないが、それでも少しずつ増えてきていることは確かである。

また、一九九九年には均等法が改正され、ここでは、これまで努力義務とされていた募集・採用時点での女男に対する異なった取り扱いが禁止され、採用に際して使用する職業名も「看護婦」から「看護師」、「ボーイ」から「ホールスタッフ」などのように、どちらかの性を含みこんだものからジェンダー・ニュートラルなものへと変更されるに至っている。

さらに、一九九九年の男女共同参画社会基本法の公布・施行をはじめとする、公的な女男平等施策の進展にも注目する必要がある。二〇〇〇年の国連特別総会時には、ポスト北京会議として「女性2000年会議」がニューヨークで開催されたが、翌〇一年には日本でも男女共同参画局と男女共同参画会議が設置され、「男女共同参画週間」が始まった。そして、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」(〇一年)、「改正育児・介護休業法」(〇二年)、「次世代育成支援対策推進法」「少子化社会対策基本法」(〇三年)などの法律が矢継ぎ早に施行されている。

国は、男女共同参画社会づくりの「行動計画」において、あらゆる分野で女性が活躍する施策を掲げ、政治、行

政、企業等の公的領域で政策・方針決定過程に参画する女性の割合の数値目標を定めるなど、女性を増やす施策を推進している。敬称のつけ方をはじめとして、女性と男性を紙面上で同等に扱う環境は、徐々に整いつつある<sup>13)</sup>のである。

### (3) 時代の「風」とともに新聞社の考え方も変化

これらの時代の「風」を、新聞メディアも感じたのだろう、一九八〇年代半ば以降、新聞社内部においても、「女史」ということばづかいや、女性と男性に対する「さん」と「氏」の使い分けなどに関して、少ないながら議論がなされるようになっていく。こうした変化は、一方では、女性の新聞記者たちを中心にした内部批判によってもたらされてきた。たとえば、朝日一九八九年一〇月一七日の新聞週間特集では、「女性から見た日本の新聞 新聞週間によせて 座談会」が企画され、「女史」や、「女性〇〇」「女流〇〇」、当時女性の議員候補者によく使われた「マドンナ」ということば、また「主婦」をはじめとした「女性は家庭」という固定観念等を批判している。朝日は、九一年一月七日にも、既に紹介したように、メディア欄で「スー・チャー『女史』でいいの？ 性別にはメリット」という記事を掲載して、問題提起を行っている。また、毎日九三年九月一三日の夕刊では、「校閲部午前3時」性差別解消、読者の声を支えに」というコラムで、女性の記者が、「OL」「女性会社員」「未亡人」「婦女子」「女史」といったことばづかいを取り上げて、「『嫌だ』と声をあげていこう」と提案している。これらの内部からの批判は、九〇年代前半に、本調査でも目に見えて「女史」が減り、「さん」づかいになって行った時期と、ほぼ合致する<sup>14)</sup>。

また、二〇〇一年発行の共同通信社『記者ハンドブック〔第9版〕』では、「差別語、不快用語」の章における

「▽性差別」の項で、「女性を特別視する表現や、男性側に対語のない女性表現は原則として使わない。」として、「女流↓『女流名人』などの固有名詞以外は使わない。」と打ち出しているほか、「女史↓○○○○さん」という指示もある。<sup>(15)</sup>もつとも、それ自体がこの段階では、男性には当然のようにつけられている「氏」ではなく「さん」にするよう指示しているところに、女性を男性から区別して扱うことになってしまいうことに気づかない、共同通信社のマニュアルの問題があるといえよう。

共同通信社の『記者ハンドブック(第9版)』の刊行と時を同じくして、二〇〇二年一月三日朝日の新聞週間特集が、「紙面をジェンダーの視点で」と題した特集面を組み、社内の「取り決め集」を四年ぶりに改訂して、死亡記事の敬称を女男とも「さん」に統一し、ジェンダーについてのガイドラインを盛り込んだと報じたことについては、既に本稿で紹介した。もつともそれは、「読者からの声に押される形だった」のだが。新聞社内部の女性たちからの声よりも、顧客である読者からの声の方に「聞く耳を持った」ということかもしれない。

実際にこの時期に女性に対する敬称に「氏」が増えたことは、これらの成果のあらわれであると考えられよう。ただし、「有効期限」があるらしく、時間的経過とともに「氏」から「さん」へと、つけられる敬称が戻ってしまったのは、本稿のデータで示した通りである。

また、新聞紙面における女性に関する表現に変化をうながしたもう一つの要因として、新聞社において、本調査開始当時の一九八五年には女性の記者の数が全国でわずか二六九人に過ぎなかったものが、二〇一一年には三二二五人、全記者二万三〇五人の一六％へと増えたことが、少なからず関係していることも確かであろう。一方で、女性の記者が、男性中心の新聞社内でも常用され、意識の中で自動化されてしまっている女性冠詞やジェンダーを含み込んだ職業語、ステレオタイプ表現、また「氏」と「さん」の使い分けなどに対し、必ずしも疑問を持たずに使い

続けているという懸念も、ぬぐいきれない。流動化し世代交代してゆく記者たちに対して定期的な研修を実施し、表現の不断の見直しを全社的に行っていくことが必要であろう。

以上、本稿では、新聞紙面上において、人名に付される敬称が女性と男性とで異なるダブルスタンダード表現について、全国紙三紙（朝日・毎日・読売）の記事データベースを用いて収集した量的なデータに基づいて、詳細な分析を行ってきた。

新聞におけるジェンダー表現のダブルスタンダードは、敬称のつけ方にだけみられる現象ではなく、本研究がほぼ五年おきに実施してきた性別冠詞、ジェンダーを含み込んだ職業語、ステレオタイプ表現、他者に付随させられる表現、さらには記事中のディスコースや配された写真などにもあらわれている。もちろん、新聞以外のメディアにも、同様に、あるいはそれ以上に、ダブルスタンダード表現が横溢している。その根幹には、女性と男性とに性別を二分した上で、そこに価値の序列を付与する社会意識と、私たち一人ひとりの思考方法がある。新聞をはじめとするメディアは、社会意識や個人の思考方法を反映するとともに、そうした社会意識や思考方法を培養しているという、本稿冒頭で表明した立場に立つならば、新聞をはじめとするメディアに対して、ダブルスタンダード表現を是正するよう働きかけることと、私たち自身のダブルスタンダードに根ざした思考方法を改めるべく努力することが、女性と男性を対等に扱い、表現するための実践の両輪として求められているといえるだろう。

本調査研究が、メディアとオーディエンスの両方に対する働きかけの実践に、多少なりとも資することができれば、と願っている。

注

(1) (社)日本新聞協会による、加盟紙を対象とした二〇一一年一月時点での調査(朝刊・夕刊をセット販売しているものは朝夕刊合わせて一部とカウント)。ただし、総発行部数がピークだったのは、五三七六万部を記録した一九九七年のことであり、以後はほとんど前年割れで推移している。特に、スポーツ新聞の落ち込みと、朝夕刊がセットになった新聞の部数の落ち込みが激しい。なお、朝日新聞は一回あたり七七九万部、毎日新聞は三四五万部、読売新聞は九九八万部の販売部数(社)日本ABC協会の調査「新聞公査レポート」による二〇一一年上半期の平均)となっている。

(2) 日本新聞協会広告委員会『2011年全国メディア接触・評価報告書』日本新聞協会、二〇一二年。調査は一年に全国の女性七〇〇〇人に対して行われたもの(回答者数は四〇九二人)。

(3) 女性と新聞メディア研究会が行ってきた各調査の詳細については、次の論文を参照。

【一九八五年調査】田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞紙面にあらわれたジェンダー——性差別表現の量的分析を中心に——」『国学院法学』第二八巻第一号、一九九〇年、八七〜一九九頁。

【一九九一年調査】同「新聞紙面にあらわれたジェンダー(その2)——性差別表現をめぐる一九九一年の紙面分析を中心に——」同右誌、第三二巻第三号、一九九四年、一一七〜一七九頁。

【一九九六年調査】同「新聞は女性をどのように表現しているか——『新聞紙面にあらわれたジェンダー』一九九六年調査より——」同右誌、第三六巻第一号、一九九八年、八五〜一五〇頁。

【二〇〇一年調査】同「新聞において女性はどうのように表現されているか——『新聞紙面にあらわれたジェンダー』第四回調査を中心に——」同右誌、第四三巻第四号、二〇〇六年、六九〜一六二頁。

【二〇〇六年調査】同「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在——『新聞紙面にあらわれたジェンダー』第五回調査を中心に——」同右誌、第四六巻第四号、二〇〇九年、五五〜一三四頁。

なお、〇六年の第五回調査は、同「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その2)——第五回調査データの多変量解析と投書欄、テレビ面・ラジオ面、『少年』の用法の分析を中心に——」同右誌、第四七巻第三号、二〇〇九年、一〜八三頁、でさらに詳しく分析を行い、同「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その3)——『延べ語数』と『異なり語数』の経年分析および『言語計画』の観点から——」同右誌、第四八巻第四号、二〇一一年、一二七〜二三一頁、において過去二〇年

分のデータの分析を行っている。

- (4) Eichler, Margrit, *The Double Standard: A Feminist Critique of Feminist Social Science*, London: Croom Helm, 1980, p.15.
- (5) 「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在——新聞紙面にあらわれたジェンダー」第五回調査を中心に——」前掲誌、二二四頁の表18を再掲。
- (6) 「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その2)——第五回調査データの多変量解析と投書欄、テレビ面・ラジオ面、『少年』の用法の分析を中心に——」同右誌、二九〇三七頁を参照のこと。
- (7) 「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在——新聞紙面にあらわれたジェンダー」第五回調査を中心に——」同右誌、二二七頁の表20を再掲。
- (8) 遠藤織枝『気になる言葉——日本語再検討——』南雲堂、一九八七年、二二八〜二三四頁。
- (9) 毎日新聞、一九九六年七月一日「おことわり」 ミヤンマー人の名前の表記の仕方を変えます。なお、海外の英字新聞でも、本文の初出では“Aug San Suu Kyi”と表記ののち、“Suu Kyi”と書かれていることが多い。「スーチー」という略称は広く使われているといっている。
- (10) ロナルド・ウォードハフ、田部滋・本名信行訳『社会言語学入門(上・下)』リーベル出版、一九九四年。
- (11) 毎日新聞社のホームページ「毎日新聞商品紹介」<http://www.mainichi.co.jp/publish/newspaper.html>には、「一九八九年に、新聞界のトップを切つて、人権に配慮して逮捕者の呼び捨てをやめて『容疑者』の呼称を付け始めました。」とある。  
また、日本放送協会放送倫理委員会編『NHK放送ガイドライン2011』日本放送協会、二〇一一年、二七頁では、「NHKは昭和五九年(一九八四)から他社に先駆けて犯罪報道での名前の『呼び捨て』を原則としてやめ、『肩書』のほかに『容疑者』『被告』などの呼称をつけて放送している。人権尊重の立場を重視するとともに、活字メディアに比べて、放送が視聴者の感情や心理に強く訴えるという特性を考慮した結果によるものである。」とある。
- (12) 関恵靖「呼称表現『くサン』付けの使用範囲——日韓比較調査を中心に——」『四国学院大学 L&C: journal, comparative studies of language culture』2号、二〇〇四年、一三七〜一五二頁。
- (13) たとえば、一九九〇年には女性の就業業者数(全産業)は二五〇〇万人台となり、全就業業者の四割を占めるようになっていた



し、内閣府(当時総理府)による九二年の「男女平等に関する世論調査」では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」との考え方に否定的な回答は、八〇年前後に女性で二割台だったものが四割近くに増え、男性で三割近くになるなど、実態も意識も変わってきている。また、フェミニズム関係の書籍も九〇年前後から数多く刊行されるようになり、九五年の第四回世界女性会議(北京会議)頃からは、ジェンダーということが行政やアカデミズムで使われるようになった。

(14) 徐微潔「戦後新聞紙面における『男性標示語』の推移」『筑波応用言語学研究』18号、二〇一一年、一三九〜一五一頁を参照。徐はここで、朝日新聞の一九四五年から二〇〇九年にかけての「男」「男子」「男性」「男流」の「男性標示語」(私たち、女性と新聞メディア研究会のいう「男性冠詞」)を、縮刷版とデータベースによってほぼ一〇年おきに調査し、戦後から現代のトレンドをみている。その結果は、本研究会のこれまでの調査と同様に、「男」「男子」冠詞は減少したものの「男性」冠詞は増加したというものであるが、その理由として、本稿と同じように「フェミニズム運動」「表現ガイドライン」「新聞の送り手側の変化」を挙げている。

ただ、「男」「男子」がかんむりにつく語が減り、「男性」がかんむりにつく語が増えた要因について、この三つで説明するのはやや無理があると思われる。「女性冠詞」つきの表現が減った理由にこそ、三つの影響があったととらえるべきだろう。

(15) 『記者ハンドブック(第9版)』共同通信社、二〇〇一年、八六頁。

\*共同執筆者

田中和子(国学院大学法学部教員)、諸橋泰樹(フェリス女学院大学教員)、岡野雅雄(文教大学情報学部教員)、須藤典子(栃木県立のざわ特別支援学校教員)